

情報・視聴覚教育研究部
紀要
研究のまとめ 第40集

一年のあゆみ

ICTを活用して、子どもたちのコミュニケーション力アップ



平成26年度
横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育研究部会

は じ め に

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育研究会
会 長 渡 邊 和 也

今年度、情報・視聴覚教育研究会では、タブレットP Cを学習場面に導入しながら、子どものコミュニケーション力の向上をめざしてきました。

毎月行っている市の研究日には、二部会での取組をおこないました。スキルアップ部会では、タブレットP C導入に伴い必要とされる環境の整備、授業デザイン部会では、タブレットP Cの効果的な活用や思考ツールとしての可能性等々についての取組みを行いました。

タブレットP Cの画面を電子黒板で映せば、すばやく簡単に子どもの意見や考えをクラス全員が共有できます。しかし、よく考えてみれば、こういう活動は今までも行われていました。ノートを持ち寄って子ども同士で話し合いや教え合いをしたり、実物投影機で子どものノートを実物投影機で映したりして、クラスみんなで共有していました。タブレットP Cが特に効果を発揮するのは、子どもの個別学習や、子ども同士の話し合いや教え合いといった場面です。今までの活動がI C Tの活用で便利で簡単になっただけで、活動の原理は変わってはいません。今までの授業をガラリと変えようとするのではなく、活動内容は変えずに、活動の手段を新しいI C T機器に置き換えるといった考え方です。今までの授業の課題を解決するために、I C T機器を使えばいいのです。これまでの授業を変えるのではなく、I C T機器でより便利で効果的な授業にしようと考えています。

このような考え方をもとにして、12月に実施した全市一斉公開授業研究会では、二会場に分かれての実践に、200名を上回る先生方にご参加頂き、活発な研究討議を行うことができました。その結果から、今後導入を予定しているタブレットを使った学習の足がかりができたのではないかと考えております。

また、長年の成果の集積が今年度も会員の皆様のご尽力で「一年のまとめ」という引き継ぎができました。今後も研究の成果を「一年のまとめ」という成果物で残して行かれればと考えております。最後になりましたが、1年間を通してご支援、ご指導を頂きました教育委員会事務局指導企画課の皆様に深く感謝いたします。加えて本「一年のまとめ」の主筆、編集に関わられた皆様に心より御礼を申し上げます。

も く じ

はじめに	1
もくじ	2
I 研究概要	3
II 会員研究	
1 授業デザイン部会	8
2 スキルアップ部会	9
III 合同会員研修・講演会	10
IV 神奈川県放送教育・視聴覚教育研究会合同夏季特研修会	12
V 公開授業研究会	15
1 授業デザイン部会	16
2 スキルアップ部会	24
VI 横浜市小学校教育研究大会第二次大会情報・視聴覚教育研究大会	28
VII 各区の研究活動	32
会報「メディアワールド」	51
会員名簿	59
あとがき	63

I 研究概要

研究主題について

1 研究主題

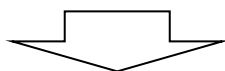
ICTを活用して、子どもたちのコミュニケーション力アップ

2 研究主題について

コミュニケーション力育成を目指すことは子どもたちの思考力・判断力・表現力を育成するための言語活動の充実に有用であると考えている。そこで、一昨年より「授業デザイン」「コミュニケーション」など新たな考え方のもと、部会編成も変更し、研究を重ねてきた。昨年度の研究の成果と課題を表1に示す。

表1 平成25年度の研究の成果と課題

	成 果	課 題
授業デザイン部会	公開授業研究会を通じて、ICT 機器の活用により、 ①学習意欲の持続、 ②学ぶ必然性、 ③対話・交流＝協働的な学びを図ることができた。	①デジタルとアナログの児童による選択、 ②主張的コミュニケーションに対する教師の意識、 ③意欲持続だけではない ICT 機器の活用方法、 ④高まり・深まりのある協働学習、 ⑤現在環境の限界＝タブレット PC への期待と活用等の課題も明らかになった。
スキルアップ部会	校務システムの運用の仕方、タブレット端末の活用方法などの提案以外にも、参加会員が一人一提案ずつ持ち寄って ICT 機器の新たな活用方法を模索したり、情報交換したりするなど、充実した研究を一年間行うことができた。	課題として、「子どものコミュニケーションツールとしての ICT 機器がどれだけ活用できるか」会員同士アイデアを出し合い、研究していく必要性も明らかになった。



成果	課題
・「授業デザイン」の意識化が図れてきている ・コミュニケーションに向かう手立てが増えた ・タブレット端末活用に向けて、実践提案があった	・研究テーマがわかりにくく、内容が難しい ・研究でめざしている具体的な姿が見えない ・現場のニーズとのずれが大きいのではないかと ・二部会が十分に連携できていなかった

今年度は、研究の主題はそのままに、より具体的実践的研究になるように、年間を通じたコミュニケーション力の育成や子どもたちのコミュニケーション力の見取りも含めた思考ツールの活用、タブレット端末を活用した授業デザインについて、研究を深めていきたい。

○ 研究仮説

子どもたちのコミュニケーション力の実態を正しく見取り、ICTを活用した授業デザインをすることで、授業のねらいに沿った情報のやりとりが増え、コミュニケーション力を身に付けさせることができるであろう。

○ 授業デザインにおけるICTの活用場面

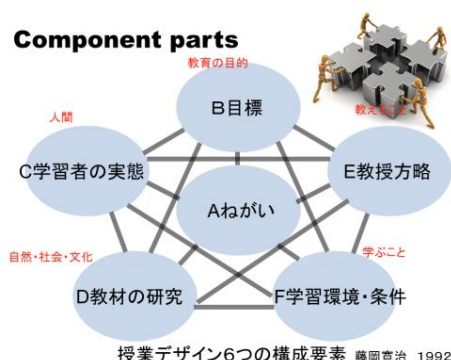
子どもたちが学んでいく上で、最終的な教師の役割は①課題の提示②学習環境の整備③学習活動の評価の三つに集約されると捉える。この三つの場面に、子どもたちが学習活動をする中でコミュニケーションのプラットフォームとしての活用場面を加えた4場面におけるICTの活用について考えたい。

I C Tの活用場面

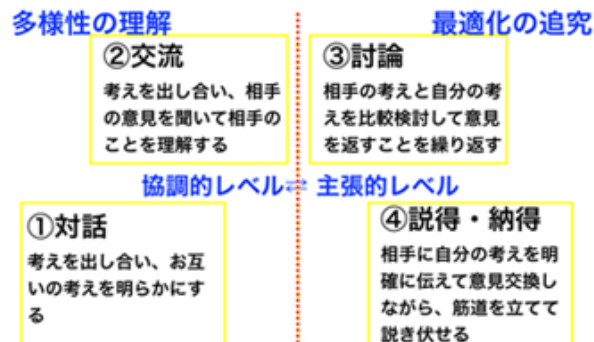
- ①課題の提示
- ②学習環境の整備
- ③学習活動の評価
- ④協働学習の核としての I C T

教師による I C T活用の意図（☆印が重点項目）

- 「知識・理解の補完・定着」
「イメージや意欲の拡充」☆
「学び方の補完」
「課題や疑問への発展」☆



21世紀型コミュニケーション力（中川一史 2011）



タブレット端末について

1 目的

- 教育の情報化ビジョンなどで示されているタブレット端末を活用した教育諸活動について、本研究会において試験的に運用し、その教育効果や運用面での課題等を明らかにする。

2 時期

平成26年7月～平成27年3月

3 内容

(1) 12月3日（水）市授業研究会における授業実践

例年行われている本研究会の授業研究会において、タブレット端末を活用した授業実践を行う。

(2) 日常的なタブレット端末活用

日常的にタブレット端末がある状況下で、どのような活用方法が考えられるのか、複数の学級において、日常的な活用実践を行う。

4 活用する機器・システム

<授業研究会>

タブレット端末（港北22台、西富岡30台）、無線LAN、授業支援システム、テレビ接続機器

<日常活用>

タブレット端末（8台）、テレビ接続機器

※タブレット端末手配等は、（株）東芝情報機器・（株）ダイワボウ情報システムの協力による

活用機器

- ・タブレット端末 TOSHIBA 製 V 7 1 4 タブレット
- ・テレビ接続機器 サイレックス製 SX-ND-4350WAN

活用アプリ

- ・ジャストスマイル
- ・算数デジタル教科書
- ・ロイロノート・スクール（授業校のみ）
- ・ピッケのつくるプレゼンテーション（授業校のみ）

5 スケジュール

	授業研究	日常活用	研究会	関連企業
～3月			事業計画立案	機器手配 ネットワーク接続 準備
5月	授業校決定		授業校・実践校決定	
7月中旬	タブレット端末導入			機器セットアップ
7・8月 (夏休み)	指導案準備 使用機器環境検討	タブレット端末導入	教員研修実施 (幹事研修)	機器保守サポート
9～12月	指導案検討 (10月) (11月) 授業研 (12/3)	活用実践		
1～3月	実践のまとめ	活用実践 実践のまとめ	第2次研究大会にて 実践発表	
3月末				機器回収

6 タブレット端末活用研究の背景

(1) 全国的な動き

平成23年「教育の情報化ビジョン」

- ・1人1台の情報端末環境を整備することが重要
- ・既存の情報端末については、一長一短が見受けられる。

→学校種、発達の段階、教育効果、指導方法、子どもたちの健康等を考慮しつつ、情報端末がどのような目的・場面で活用されることが適切かつ有効なのか、授業における指導に必要な機能は何なのか等について、十分な検討を行うことが重要



これまでの研究成果

フューチャースクール（総務省）

- ・ 学習意欲の向上
- ・ 情報リテラシーの向上・表現の多様化
- ・ コミュニケーションの活発化・相互理解の促進

学びのイノベーション事業（文科省）

<成果>

- ・ たくさんの情報から取捨選択
- ・ 表現の工夫、発表への意欲の向上
- ・ 他者との考えの比較、話合いの活性化、思考の深化

<課題>

- ・ 観察、実験や対面コミュニケーション活動など、アナログとデジタルとのバランス
- ・ 学習場面に応じたデジタル教材・ICT 機器の効果的な活用を意識した授業研究の必要性

（２）横浜市の現状と今後

無線 LAN の使用について

- ・ YY ネットに接続しなければ、申請し教育委員会との相談が必要（今回の研究）
- ・ 無線 LAN を使用しインターネット接続を行いたい場合は、YY ネット以外の回線（YY ネット同様のフィルタリング等の対応できる回線）を準備、申請し教育委員会との相談が必要

今後の動向について

第２期横浜市教育振興基本計画（素案）

目標１施策１重点取組５「先進的な ICT 教育の推進」ICT 活用能力の育成、環境整備

- ICT の活用方法について研究・実践
- 情報モラル・マナーを身につける教育の推進
- タブレット端末や無線 LAN 等の学習環境の整備を推進

（３）本研究との関連

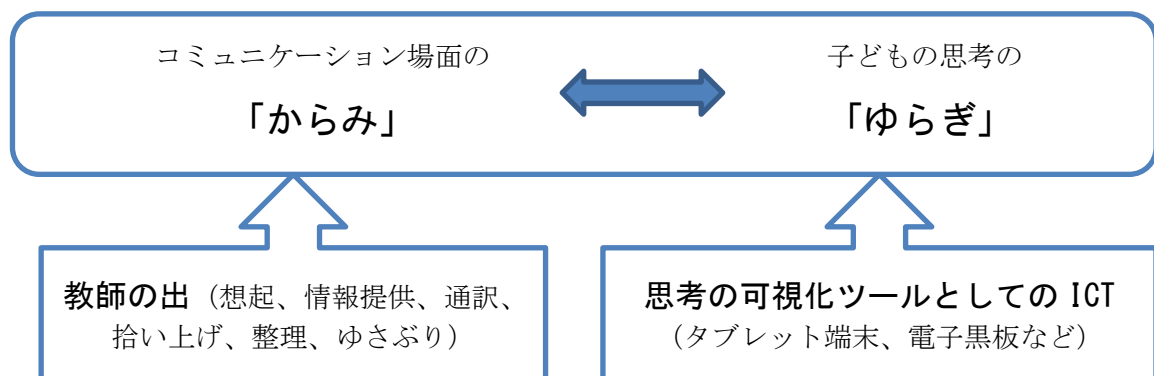
○ICT 活用場面④「協働学習の核としての ICT」

協働的な学びで求められている「多様性の理解」と「最適解の追究」＝コミュニケーション力

○「からみ」や「ゆらぎ」を起こす授業場面

「からみ」（絡み）＝目的を持って、論点を明確にして話合いを深めていくさま

「ゆらぎ」（揺らぎ）＝子どもが自分の考えがゆさぶられること



○思考の可視化とタブレット端末

タブレット端末の4つの特徴

① パーソナル～個々への対応～

映像の視聴に限らず、グループや個人のペースで活用できる

② コンパクト～気軽な持ち運び～

気軽な持ち運びが可能、かつ、グループで情報を共有できる

③ オールインワン～収集から加工・表現まで～

撮る、見る、かき込む、大きくする、見せるなどを一つの端末だけでできる
学習の履歴を保存、転送し共有できる

④ プラットフォーム～思考力に着目した授業改善の可能性～

子どもたちの思考をリアルタイムに把握、必要に応じて転送・共有
思考が集まる拠点にすることができる

授業研究会の討議の柱

今年度の授業研究会の研究討議では、討議の柱として次の二つの視点で話し合った。一つは共通の視点、もう一つは部会ごとに設定した視点である。

討議の柱 1

共通の視点「本時のねらいを達成するための ICT 活用ができていたか？」

討議の柱 2

授業デザイン部会「ICT がコミュニケーション力を高めるための手立てとなっていたか？」

スキルアップ部会「本時が非対面コミュニケーションの育成につながっていたか？」

時間もスペースも限られた中ではあるが、参会者のコミュニケーション力をフル活用していただき、充実した討議となった。

<参考文献>

中川一史他編著（2011）『コミュニケーション指導の手引き』（高陵社書店），p.2

文部科学省（2011）「教育の情報化ビジョン」，p.13

総務省（2013）「教育分野における ICT 利活用推進のための情報通信技術面に関するガイドライン（手引書）2013 小
学校版 ～実証事業 3 年間の成果をふまえて～」，p.3

文部科学省（2014）「学びのイノベーション事業成果報告書」，p.9～10

横浜市教育委員会（2014）「第 2 期横浜市教育振興基本計画 素案」，p.21～22

中川一史（2014）「協働的な学びの成立」『タブレット端末で実現する協働的な学び』（フォーラム・A），p.11～16

中川一史（2014）「「きらり」と光る ICT 活用にいかに迫ることができるか」『タブレット端末活用実践事例集』（Sky 株式会社），p.2～3

Ⅱ 会 員 研 究

平成27年2月4日

横浜市小学校情報・視聴覚教育研究部会・授業デザイン部会

1 部会研究主題 教育メディアを効果的に活用し、コミュニケーション力を育む授業デザイン

2 研究主題について

子どもたちの実態を正しく見取り、教育メディアを活用した授業デザインをすることで、授業のねらいに沿った情報のやりとりが増え、主張レベルのコミュニケーション力を身に付けさせることができるだろうと考えた。

そのために、子どもたちの協働的な学びや、授業をデザインしていく教師の役割について研究を進めていくこととした。ICTが思考を可視化できる手立てとしてどのように寄与していけるか考えていきたい。

3 年間部会報告

【4月】定期大会・公演会・部会オリエンテーション

○年間計画・役割分担

【5月】スキルアップ部会との合同研究

タブレット端末を活用した学習スタイルの体験型研修～タブレット端末クライアントソフトの活用～

○「タブレットシンク」アプリケーションを使用した、学校での活用方法が提案された。

【6月】部会研究 イメージマップを活用した集団思考と子どものみとり（藤塚小 千葉教生先生）

○イメージマップを活用することで児童の思考が広がり、深まりを自分で認識でき、可視化できるものとして有効な学習ツールである。児童のメタ認知や感情の揺れ、興味の側面が視覚化され焦点化していけるメリットがあるという報告を頂いた。

【7月】合同会員研究・研修会 中川先生講演会（放送大学）

○「One of them のICTを意識しよう」タブレットありきではなく、タブレットとこれまでの学習ツールを上手に使い分け、より効果的に児童の思考を促し、可視化するツールとして活用を推進していくべきという示唆をいただいた。

【9月】部会研究 シンキングツールを使った授業デザイン

○思考の見える化ができるシンキングツール（思考ツール）を用いて、公開授業研で扱う単元にどのように生かせるか、授業づくり研修を行った。それぞれのツールの特性が分かり、単元のどの位置にどのように使うと効果的か、活発な意見が交わされた。

【10・11月】部会研究（港北小 近藤睦先生）

○公開授業研究会 指導案検討①②

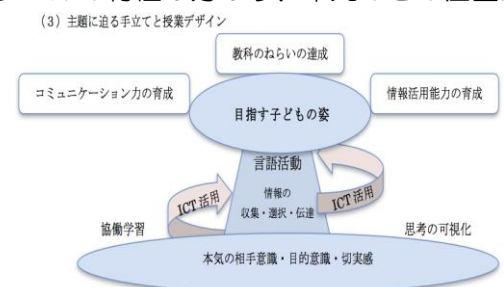
【12月】公開授業研究会（港北小）

【1月】部会研究

年間のまとめ～公開授業研究会を受けて、今年度の成果と課題を話し合う～

○アプリやスペック、ネットワーク環境等に左右されながらも、企業のスタッフのサポートを受けながら、タブレットの動的ツールとしての有用性を十分に発揮した実践となった。タブレットが協働的な学びと思考の見える化に寄与し、児童の主体的な学びやコミュニケーションを促しながら、学習活動を充実させる可能性を秘めていることが立証された。同時に、児童が責任をもって機器を扱えるようなマナー・モラル指導が不可欠で、タブレットを日常的に活用し、児童の文房具的な存在にまで使い込んだ実践としては価値が高かった。情報モラルは児童の必要感に合わせて指導することもできた。

○ツールが変わっても、またはツールが無くても大切な学びの価値があるはずである。そして、ICTとともに大切な考え方やアナログツールの研究も興味深い。それらをひっくるめてデザインしていくのが本部会の担うところではないだろうか。



1 部会研究主題 “教員の ICT 活用能力のスキルアップをめざして”

2 研究主題について

子どもたちの ICT 活用能力や活用の幅を広げるためには、教員のスキルアップが必要である。そのために、ICT 機器の環境整備や活用方法、情報モラル教育や教育の情報化について研究を深めていく必要がある。また、子どもたちのコミュニケーションツールとしての ICT 機器の活用方法についても更に研究を深めていきたい。「教員が学校内の情報機器を日常的に活用し、円滑な運用ができる」ことが、子どもたちのコミュニケーション力アップにつながることを目指して、今年度の研究に取り組んでいきたい。

3 年間部会報告

【4月】定期大会・公演会・部会オリエンテーション

○年間計画・役割分担

【5月】部会研究 タブレット端末を活用した学習スタイルの体験型研修～タブレット端末クライアントソフトの活用～

○「タブレットシンク」アプリケーションを使用した、学校での活用方法の提案

【6月】部会研究 デジタルペン活用事例

○デジタルペンの基本機能説明、体験デモ、電子黒板・プロジェクター連携の実践事例、高野先生の実践事例、タブレットとの連携活用事例、グループワーク～デジタルペンでの発表

【7月】合同会員研究・研修会 中川先生講演会（放送大学）

○思考の可視化とタブレット端末活用について

【9月】部会研究 タブレット向けプレゼンテーションソフト・ロイロノートを体験してみよう

○ロイロノートの使い方、特徴や利点、実践事例、タブレットを使用して実際に使用

【10月】部会研究

○公開授業研究会 指導案検討①

【11月】部会研究

○公開授業研究会 指導案検討②

【1月】部会研究 タブレット導入に伴う環境整備の実践例

文部科学省そして横浜市が見据える2019年の環境～第二期教育振興計画の読み解き～

○タブレット端末を実際に使用しての利点や課題、今後必要になってくる環境整備について

○文部科学省の第二期教育振興計画と全体概要、ICT の活用などによる協同型・双方向型授業の推進
教育の情報化が目指すもの、教育のIT 化に向けた環境整備4カ年計画について

今年度も引き続き「教員のスキルアップ」を目標とし、タブレットPCの活用方法や環境整備、ICT機器の活用方法・情報交換、アプリケーションの活用やタブレットとソフトウェアとの連携等、各校の情報・視聴覚担当者にとって身近な課題、必要感のある課題について研究していきたいと考えていた。

良かった点として、実践提案・研究だけでなく、どの場でも意見交換の場がもてたことが挙げられる。また、昨年度の課題であった「子ども同士のコミュニケーションツールの一つとして情報機器を活用」という目標も、公開授業や指導案検討等を通してより一層深めていくこともできた。児童のコミュニケーション力アップという目標に対しては、引き続き研究と実践を重ねていく必要があるが、研究会として日常的に校務や授業にICT機器を有効活用しながら進めていくために、スキルアップ部会では情報・視聴覚担当の先生方と実践や研究、交流の機会が更にもてるよう工夫して部会を運営していきたい。

Ⅲ 合同会員研修 ・ 講演会

於：平成26年7月2日 15:30～

西公会堂

「思考の可視化とタブレット端末活用」

放送大学教授 中川一史先生

○導入される前に検討する意義は大きい

- ・ 機器が入ってからでは遅い。
- ・ 事前に考えていくことに意義がある。
- ・ 市教委も一緒に検討することに意義がある。
- ・ 国は中心に据えている。
- ・ 他の ICT 機器と違い手強い。

○タブレット端末活用の特徴

- ・ 児童生徒が活用するツールである
＝ 教師がコントロール仕切れなくなる可能性がある
- ・ 電子黒板の象徴的な活用シーン
 - a. 「拡大、縮小、動かすなどの視覚効果を用いることで理解が深まる」活用シーン
 - b. 「実物投影機（書画カメラ）等で、子どもの作品や手元の操作の様子を示すことで理解しやすくなる」活用シーン
 - c. 「子どもが目線を挙げて集中して話を聞くようになる」活用シーン
 - d. 「教師が書き込みながら説明することで子どもが授業内容を理解しやすくなる」活用シーン
 - e. 「かくして於いた情報を見せることによって理解が深まる」活用シーン
 - f. 「電子黒板に板書や子どものノート・作品を保存して続きの授業で生かせる」活用シーン
 - g. 「小グループで電子黒板を使いながら子どもの話し合い・教えあいが促進される」活用シーン
 - h. 「子どもが相手に分かりやすく発言するのに効果がある」活用シーンこのうち、g、hが、子どもが活用するシーン。電子黒板は、基本的に教師が使用するツールである。

○タブレット端末導入パターン

タイプ	台数	誰が
教師用	教師1台	自治体 学校・教師
グループ分導入	8～10台	自治体 or 学校
1クラス分導入	20～40台	自治体
複数クラス分導入	150～200台	自治体
全児童生徒分	児童生徒一人1台	国
個人所有	児童生徒一人1台	保護者

それぞれのパターンごとに活用方法が変わってくる。

教師1台：理科実験を撮影して説明するなど。実物投影機と違い、ケーブルが必要ない。

グループ分：タブレット端末で写真や動画の撮影から視聴までできる、オールインワンのタブレット端末のよさが生かされる。

1クラス分：教科書にどんどん書き込むことができ、子どもたちのゆらぎが見えてくる。動かすよさを活用することがポイント。

一人1台 : SNS も活用できる。公費購入だと、教材教具の扱い。個人所有だと、文房具の扱いになる。二人で2台、四人で4台使うなどの活用方法もある。留意点としては、充電や故障の対応、学習履歴の蓄積、テンポを悪くしない機器の導入など。

○動的なツールとしてのタブレット 11の活用方法

- ① (文章などを) 読む
- ② (映像などを) 見る
- ③ (声・音や音楽を) 聞く
- ④ (文字や文章を) 打つ・書く
- ⑤ (ラインなどを) 引く・(図表や写真などの上や横に) 書き込む
- ⑥ 撮る
- ⑦ 動かす
- ⑧ 大きくする
- ⑨ 見せる
- ⑩ (デジタルテレビなどや友達のタブレットに) 送る
- ⑪ 保存する

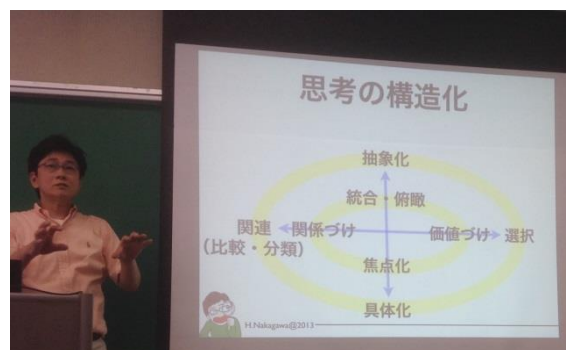
3、6、7、8、10、11 は、タブレット端末でないとできない。
この部分を意識していくことが大切。

○思考の可視化ツールとしてのタブレット

思考の可視化

= 頭の中にある思いや考えを視覚的に表すこと
(例: 比較・分類、選択、交流、討論)

子どもたちに思考を求めるとき、抽象化・具体化、関連、
選択のどのベクトルをねらっているのか、意識することが
大切=教科横断的な授業研究が必要



○One of them の ICT を意識しよう

アナログを使うのか、デジタルか。両方検討することが必要。

○質疑

Q 特別支援教育の活用と一般級としての活用と二極化していくのか？

A 一人一台では、知識理解の定着として活用できる。

グループでは思考の可視化として有効。

導入形態によって活用法も変わってくる。

特別支援教育=個人のペースで学習を進められる

Q デバイスに保存する考え方は？

A サーバーに保存するのは面倒なところもある。

Q サーバー=無線 LAN では？

A ガイドラインの解釈の中で活用しているところもある。

Ⅳ 神奈川県放送教育・視聴覚教育研究会合同夏季特別研修会

第1講座(放送教育)

思いを伝え合い、学びを深める放送教材 ～NHK 学校放送「いじめをノックアウト」を活用して～

提案 横浜市立茅ヶ崎小学校

教諭 岡田 貴彦

助言 川崎市立金程小学校

校長 小松 良輔

司会 川崎市立平小学校

教諭 福山 創

記録 川崎市立梶ヶ谷小学校

教諭 細川 直弥

1. 提案要旨

昨今社会問題化しているいじめについて、自分の事として考え、みんなで議論することで初めていじめのない望ましい人間関係を築くことにつながると考えた。「いじめをノックアウト」は、子ども達の視点で話合いが出来るようにつられていて、放送回ごとに様々な角度でいじめをとらえることができる。そのため、児童の実態と教師の願い、身に付けさせたい力を総合的に考えて、「話合いが身近に感じられる内容か」「生活において必要感があるか」という視点で視聴回を複数選択した。ワークシートも番組HPに掲載されているが、参考程度として設問数を絞り、話し合いの時間を確保に努めた。



こうすることで、毎回同じ学習の流れで話合い活動に取り組むことができ、安心感をもって思いを伝え合う姿が見られた。

また、子どもの実態を考え、視聴する目的を明確にもって意図的・計画的に視聴計画を立てていくことで子どもの思いを引き出すことができ、自分の考えをもって話合いに取り組むことで、互いの共通点や相違点に気付きながら話合いができた。これは、設問数を絞ったことでじっくりと問題に向き合うことが出来たことも関係していると考えられる。しかし、適当な実践時期が何時なのかという課題も見つかった。

2. 協議内容

・子どもからの本音を引き出すための具体的な手立てや取り組みは。

→紙ベースには本音を書きやすいので、ワークシートや発問を工夫している。発表し難いものは発表しなくても良い。自分と重ねすぎないで感情的にならないように指導している。

・適当な実践時期が課題と感じたのはなぜか

→中学年では、素直に番組をとらえているため、素直

な反応が出やすいと思う。高学年では多様な意見が出たが、実体験を重ねすぎて感情的な発言になったり、意見が言い難い環境になったりしたため。



3. 指導助言

ワークシートに「ず～っと」や「い～っぱい」など子どもの背伸びしていない素直な思いが書かれている。これは、今回使った放送教材が子ども達なりの視点で共有化が図りやすい構成になっていると共に提案者の教材分析の確かさでもある。子ども達なりの視点がなければ、「認め合い」や「共感」や「深まり」や「仲間意識」は生まれない。こうした放送教材の良さを活かすと共に子ども達の話し合いの中に有効に活用しようとする教材分析がきちんと出来ていた。

また、学級経営の素晴らしさと、放送番組としての完成度の高さがより効果を上げている。特に、「こころ」を育む内容の場合、放送教材の継続視聴の効果は大きい。提案の中の、「安心感をもって思いを伝え合う姿が見られた。」という部分は、少しずつ自信をもって自分の意見が言えるということで、学習の仕方も身につき、そうした安心感が根底にあって自分なりの思いを素直に表現できたのではないかと。

さらには、考える時間をしっかりと確保するために、設問数を絞ったり、子どもの実態にあった視点を考えたりするなど、本音で語って考えることのできる発問や授業の組み立てなどが大切であり、授業デザインのポイントとなる。

ICT の強みを考えた授業デザイン

提案 横浜市立東汲小学校 教諭 吉田 圭一
司会 横浜市立茅ヶ崎中学校 教諭 伊吾田 政宗
記録 横浜市立南ヶ丘中学校 教諭 飯田 慎也

助言 横浜市教育委員会指導部指導企画課
主任指導主事 松田 裕

1. 提案要旨

本提案では、ICT 機器を用いて、教科の学習目標の達成と児童による ICT 活用技術の向上を目指し、授業実践を行った。単元は4年生社会科の「吉田新田」。まなボード、デジタル吉田新田を用いてその概要をつかみ、そして横浜歴史博物館のエducーターの話聞く中で児童一人一人に疑問点や課題を考えさせた。その後自分で資料を集めて疑問点を調べ、伝えるチカラPRESSでプレゼンテーション資料を作成させ、グループごとに発表させた。



今回の実践では、ICTを取り入れることで学習活動の楽しさを味わい、達成感や自信が生まれた児童が多く見られた。これは学習意欲

を持続させることにつながると考えられる。また、プレゼン資料を作成する中で、「より分かりやすく資料を作るにはどうしたらよいか」と意識する児童が増え、生徒同士の関わり合いも深まった。しかし、資料作成時間に個人差があり、授業時数が足りなくなる可能性や、児童からのアウトプットが減ってしまったことが課題として残った。

2. 協議内容

○教育支援ソフトについてももう少し詳しく教えてください。
⇒写真を組み込んで新聞やスライド、ポスターなどを作る、また動画を組み込んで番組作成もできる。学年に応じて作業難易度を変え、さらに教員も資料作りが可能である。

○今回の実践は、児童がグループ単位で学習を進めるスタイルであり、協働的学習としては有効である。また、作業用PCの配置は生徒間でコミュニケーションがとりやすい工夫がされている。児童・生徒がコミュニケーションをとれるような活動をするためにはICTの活用が必要である。

○目的意識をもって、広がりのある授業実践であった。

⇒クラスの中だけで完結してしまう授業ではなく、エドゥケーターも含めた形で展開できた。

○ICT機器の活用方法について、児童に年間を通してどのような指導をされたのですか？

⇒PCの操作方法やプレゼンの進め方に慣れさせるため、他教科や学級活動でも取り入れて機器に触れる機会を増やした。

○資料作りではアウトプットは減るが、資料選択の過程があるので良いと思う。評価について、協働作業の場合はどのように行うのか？

⇒グループでの評価の場合は、一人一人に振り返りカードを書かせ、それを評価した。

3. 指導助言

昔はビデオやCDなどで、教師から児童・生徒に一方的に伝えることが主流であったが、今はインターネットなどによる双方向通信、情報を相互に伝え合うことが主流となっている。

今回の授業はとても綿密な計画が立てられていた。また単元指導計画に沿って「つかむ→調べる→まとめる→広げる」の構成がしっかりできていた。児童が資料を作成した際、どのような資料が使われたのかを学年の資料としてストックしておき、来年同じ単元の授業を行うときに参照し、より良い授業を作って欲しい。また、横浜市ではICT機器学習プログラムとして、ローマ字入力やPC操作などの練習を年間10時間程度(小1～小3)するようにお願いしている。

ICT機器を使用する上で、トラブルは避けて通れない。これに対応するために、教員2名体制で行うことが望ましい。今後タブレット導入により、無線LANによるトラブルも考えられる。



情報化社会を生き抜くための情報モラル教育

提案 横浜市立鴨志田緑小学校 教諭 武井 三也
司会 相模原市立清新小学校 教諭 小野寺 明彦

助言 相模原市総合学習センター 竹鼻 直樹
記録 相模原市立大島小学校 教諭 佐藤 司明

1. 提案要旨

近年、情報化社会の進展は日々加速する一方である。子どもたちを取り巻く環境も、年々大きく変化し、小学生が携帯電話を所持し、日常的にインタ



ーネットを利用する機会も増えている。一方で、子どもたちの情報モラルが十分であるとは言い難い。情報化社会を生き抜くために情報モラルを育成し、子どもたち一人ひとりが身につけ活用できる必要があると考えた。また、情報モラル教育で「相手意識」を培うことで、日常生活におけるコミュニケーション力の育成にもつながると考えた。

2. 協議内容

○相模原市では、全ての教員が情報モラルを指導できるよう情報モラルハンドブックを作成し、小中学校に配布し活用している。小学校1年生から中学校3年生まで体系的なカリキュラムが組まれている。学校によっては情報モラル週間、月間を設定し活動している。質問だが、横浜市や勤務校では情報モラルに関する取り組みをしているか？

・現在の勤務校では少ない。前任校では学年の中で内容を話し合い、指導していた。横浜市では ICT 横浜スタンダードに応じて実践しているが、情報モラルでは足並みが揃っていない現状である。

○今回の実践では、「情報モラル」、「日常モラル」と2つの言葉が出てきたが、「モラル」という概念の中に「情報モラル」という1分野があるという考えのほうがよいのではないか。ICTの意識は、日常的な人間関係の中で培われていかないと相手が見えなくなるのではないかと考えた。

○情報モラルというと、以前は子どもたちが被害者になる場合を想定した指導が多かったが、現在は加害者にもなり得るという双方向の立場で指導しなければならない

い。また、保護者へも情報モラルとは何なのかを伝えていかなければならないと感じる。

○質問だが、実践2で「相手への影響を考えて行動しようとする児童を育てたい」と考えていたのにうまくいかなかった原因は何だと思うか？

・導入や発問で、相手へ意識を向けさせることができなかったのではないかな。

3. 指導助言

情報機器の急速な普及にともない、社会全体で日常的に利用されている。インターネットは子ども大人も関係なく、同じ環境で使われている。したがって、情報モラルに関する教育を、適切・計画的に指導する必要がある。情報モラル教育は、情報社会で適正な活動を行うための基になる。

道徳の時間に情報モラルに関する授業を展開する事が多いが、道徳は「道徳的価値の自覚、自



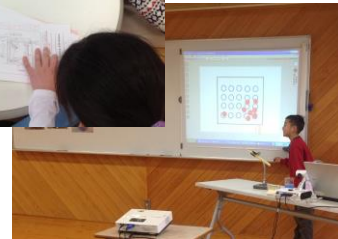
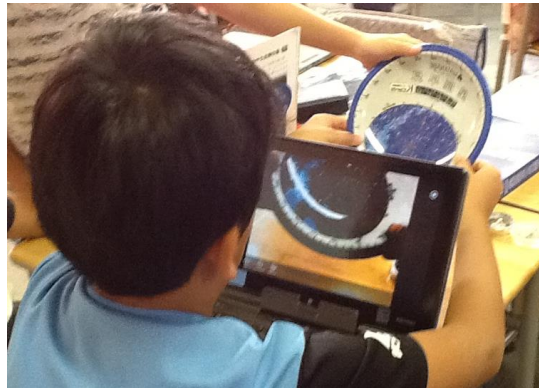
己の生き方についての考えを深める、道徳的実践力の育成」をめざすもので、それは情報モラル教育においても変わるものではない。しかし、情報機器の使い方や対処法などを主眼として指導することは適さないことも注意してほしい。

今回の実践では、道徳の時間の「ねらい」を的確に定めている。「ねらい」に迫る教材として、日常生活に関わるもの、情報モラルに関わるもので実践している。情報モラルに関わる教材を使った実践では、相手意識が希薄になった。これは特性の1つとして捉えていいと考える。授業者の発問や迫り方によって、教材が有効なものになるかどうかは鍵である。また、実施する時期もポイントになる。そのためには、情報モラル教育のカリキュラム構築と、散発的にならぬよう一貫性をもった確実な実践が重要だ。

V 公開授業研究会

研究テーマ

「ICT を活用して、子どもたちのコミュニケーション力アップ」



平成26年12月3日（水）

14:00

14:45

15:00

16:30

16:40

受付	授業公開	移動	研究協議	指導講評	片付け
----	------	----	------	------	-----

授業デザイン部会	スキルアップ部会
横浜市立港北小学校	横浜市立西富岡小学校
討議の柱 ○ 本時のねらいを達成するための ICT 活用ができていたか？ ○ ICT がコミュニケーション力を高めるための手立てとなっていたか？	討議の柱 ○ 本時のねらいを達成するための ICT 活用ができていたか？ ○ 本時が非対面コミュニケーションの育成につながっていたか？

- 1 日時・場所 平成26年12月3日(水) 5校時(14:00～14:45) 教室
- 2 学年 4学年2組 児童数 39名
- 3 単元名 「4-2おとなになるっていうことは物語
～未来の自分に役立てるために『職業デジタルリーフレット』をつくって
街中(まちなか)で働いている人の心の火をしょうかいし合おう～」
教材名 「アップとルーズで伝える」「仕事リーフレットを作ろう」(光村図書)

4 単元について

(1) 児童の実態

- ・課題解決的な学習展開を楽しみながら、自ら学習を進めていこうとする姿勢が見られる。前年度の学習から、教科横断的に学習したり既習の学習を活かしていこうとしたりする意識をもつ子どもが多い。
- ・「書くこと」に関する実態として横浜市学習状況調査においては図1のような結果である。「15 文章をよりよい表現に書き直すこと」に課題が見られている。そこで5月に「新聞を作ろう」で新聞の形式を学習し、その後は社会科や行事などで疑問に思ったことを調べたり、心に残ったことをまとめたりして報告する学習を重ねてきている。その際の制作はメディアセンターで一人一台のPCを使い、児童用の新聞制作用アプリケーションソフトを活用している。この活動から何度でも容易に修正できるデジタルの良さを生かして、推敲することを意識できるようになってきている。

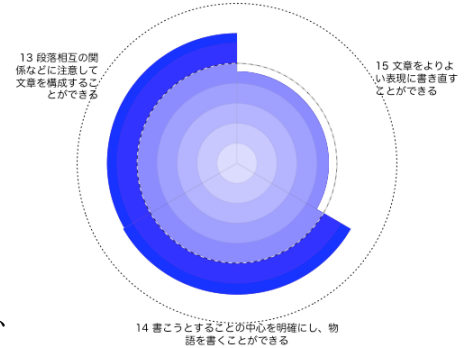


図1 平成25年度横浜市学習状況調査結果
港北小学校3年生 「書くこと」

- また、「段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」は、本単元でのリーフレットづくりのなかで、効果的な紹介のための文章構成について考えさせ、さらに伸ばしていきたい力である。
- ・伝え合うことの学習としては、9月「だれでも関わり合うために」で、図書資料やweb上の情報、体験活動などを通して取材したことをまとめ、互いに説明し合う活動をしている。取材した内容から伝えたいことを選択し、効果的な順序や資料の見せ方の方法を考えて、ワークショップやプレゼンテーションなどの形式を選んで説明した。
 - ・夏休み明けの8月末より、2人組で1台のタブレット端末を使用している。タブレット端末を使って写真を撮影して観察記録を書いたり、説明の際の提示資料を作成したり、グループで教具の使用方法を動画でまとめたりするなど、様々な教科・領域の学習活動で利用してきている。

(2) 単元の特徴

- ・本単元では写真と文章を使って、自分が伝えたいことを効果的に説明したり、紹介したりすることをねらいとする。
- ・「アップとルーズで伝える」は「アップ」と「ルーズ」の意味やはたらきの違いを写真と文章で説明している。写真と関連させながら文章を読み取り、段落の内容や、対比的に表した説明、段落相互のつながりを学習することができる。
- ・「仕事リーフレットをつくろう」の単元をつなげて、読むことと書くことの複合単元として扱い、写真に対応する説明的な文章を、「アップ」「ルーズ」の視点で書かせるようにする。教材文を読み取りながら書く活動につなげていけるよう関連を図り、必然性をもった学習ができるように配列してある。

(3) 教師の願い

本学級の子どもたちは今年度中に10歳になる。1月には保護者やお世話になった方々を招いての「10歳を祝う会」を予定している。そこでまず、単元に入るときに、「おとなになるということ」について十分にイメージを拡げさせたい。そして、1月までの様々な学習や、生活のなかで考えを深めていけるようにさせたい。「おとなになるということ」から、自然に子どもたちの思考は「働くこと」「職業」にも向いて行く。そこで、それぞれがグループに分かれて身近な職業について調べて説明し合う活動に自然につなげて行くことができるはずである。

本単元で取り扱う職業については、子ども自身が目指している職業ではなく、「何度も取材できる

くらい身近な人」として昨年度、今年度の間に学習を支えてくださった方々を中心に選ぶことにしたい。この学習を通して、身近な職業に就いている大人、一人ひとりの心の中にある「職業への思い」や、「日常の苦心や手応え」について実感し、説明し合うことから「おとなになるということ」について考えを深めていけると考える。そうして「10歳を祝う会では、自分のもった職業観や大人への敬意をもとに、招待した保護者に向けて自分なりの見方・考え方を発表する」という次の学習活動とゴールを設定し、つながりと切実感のある問題解決学習にしていきたい。

5 研究主題とのかかわり

平成26年度横浜市情報視聴覚教育研究会 授業デザイン部会研究主題

「教育メディアを活用し、コミュニケーション力を育む授業デザイン」

(1) ICTの活用

機器・・・タブレット端末(Windows8.1) 22台 電子黒板 画面転送システム

アプリケーション・・・ロイロ・ノート

普段は二人で一台のペア学習で活用しているが、本単元では4人グループで協働的にデジタルリーフレット制作をする。そのため、本時では「4人に二台」の活用を基本としたい。一台で写真を閲覧しながら、一台で制作を進める作業をする。画面転送システムによって、児童機より教師機に送られた画像を電子黒板に映して共有する。

ロイロ・スクールは、タブレット端末用アプリケーションであり、静止画・動画の撮影や、書き込み等の編集機能、ページの追加、削除、並び替えなどが簡単で、全体の構成を俯瞰して作業することができる特徴がある。本学級の児童が日常的に一番よく使用しているアプリケーションでもあり、どの子どもも使い慣れている。

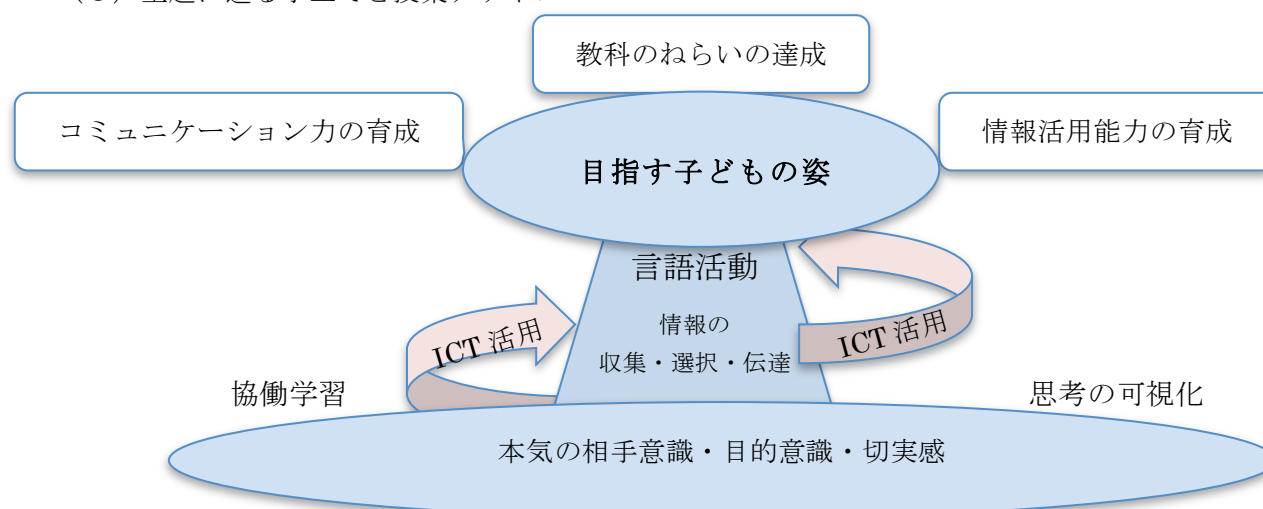
(2) コミュニケーション力の育成

「アップとルーズで伝える」を読みながら、デジタルリーフレット作りを視野に置き、「写真に対応した文章を書く」というねらいをおさえていく。教材文において対比的に書かれた本文や、それに対応する写真を比べて読み取りながら、自分のリーフレット作成に活かしていくことを常に考えさせたい。

これと並行して進める学習として、3～4人のグループごと一つずつの職業について調べ学習を進めて行きたい。個人でしっかりと取り組ませた後に、それを持ち寄っての協働的なリーフレット制作に取り組むことにする。学習を進めるにあたっては、実際に働いている人へのインタビュー取材を大切にしたい。実際に会えない遠方の人物については、電話やFAX、電子メールでの質問、手紙など非対面コミュニケーションの場面も仕組んでいきたい。必要感をもって情報リテラシーを身に付ける機会にできるはずである。

取材した事実を根拠に、伝えたい事柄にあった事例の選択や、その構成、より効果的な伝え方を考える場面等を仕組んでいきたい。答えが一つではない問題を話し合わせるなかで、相手意識・目的意識に合わせた「最適化の追求」を話し合う主張的レベルでのコミュニケーション場面を仕組んでいきたい。

(3) 主題に迫る手立てと授業デザイン



<言語活動の特徴>

本単元を貫く言語活動として「デジタルリーフレットを制作して紹介すること」を位置付けた。

自分の課題を解決するために目的をもって取材したことや関連図書から得た情報を整理し伝達する言語活動は、他教科・領域等での学習でも有効に活かしていける活動である。

なお、本単元で扱う「デジタルリーフレット」とは、紙製のリーフレットとは異なり制作後に印刷することを想定せず、タブレット端末の画面上で閲覧するものとする。

「デジタルリーフレットを制作して紹介すること」の特徴として、主に以下のようなことが挙げられる。

- ① 具体的に相手をイメージして紹介する内容を選択する。
- ② 目的に合った調査活動をする。
- ③ 情報の収集、伝達する場面で写真、録画、音声などを活用する。
- ④ 集めた情報を分類整理する。
- ⑤ 伝えたい内容によって写真、動画、音声など情報の種類を選ぶ。
- ⑥ 書きたいことの中心、写真などの組み合わせについて検討する。
- ⑦ 目的にあわせた構成について工夫する。
- ⑧ 紙媒体よりも推敲が容易い。
- ⑨ 複製し修正前後の成果物を残すことができる。
- ⑩ 持ち運ぶことのできるタブレット端末を紙面代わりにすることで、場所を選ばず動画・音声なども閲覧する。

「デジタルリーフレットを作って説明する」という言語活動の特徴が、単元目標の実現にむけて有効である点と考える点は、以下の3点である。

一点目は、相手意識である学級の友達にとって「仕事に就いている大人の職業観や、職業に対する本気の姿を感じることができるか」「新しい気付きがあるか」を意識しながら取材や調査を進め、効果的に説明するための工夫ができる点である。

二点目は、取材したり、調査したりする中で集めた写真や動画をデジタルリーフレットに取り込み、写真と文章を対応させて書くよう工夫できる点である。「アップとルーズで伝える」で学習した効果的な写真の選び方と文章の対応について活用していく。その過程において、これまでの印刷した写真を使つての授業に比べて、タブレット上で写真の扱いが容易に、無駄なくフレキシブルに行えることが大きな利点だといえる。

三点目は、グループで調査した職業についてのリーフレットを読み合い修正を重ねるなかで、質問や感想を述べやすくなる点である。タブレット画面で何度も試すことによって、細部にわたって吟味したり、意見したりすることができ、ねらいに沿った思考を深めることにつながるはずである。

以上のことから、

「関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べること」(B 書くこと 課題設定や取材 ア)「書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと」(B 書くこと 記述 ウ)を実現できると考える。

<情報活用能力の育成>

適切な「情報の収集・選択・伝達」について理解を深めさせたい。

これまでの学習のなかで出会ってきた大人や、保護者へのインタビュー、提供されたり自分で写したりした画像、web上の情報、さらに図書資料などから、自らの課題に沿った情報を収集し、選択して伝達できる力をつけたい。

そのために、以下の点における指導に配慮する。

- ① 学校司書と連携した図書活用
- ② 適切なインターネット検索の仕方の理解
- ③ 情報の出典元の確認と引用の仕方
- ④ 著作権・肖像権についての配慮
- ⑤ インタビュー・質問のための電話や電子メールなどのマナー
- ⑥ 適切な個人情報の扱い

<ICTを活用した協働学習と思考の可視化>

同じテーマで探究している友達と協働的に学習を進めることで、情報を分類整理・選択する場面では細部に

わたっての検討がかなうはずである。最適な構成、内容、表現などについて、繰り返し話し合う際、相手意識・目的意識、情報収集した事実などを根拠に相手を説得したり、折り合いを付けたりする主張的なコミュニケーション力が必要となる。児童が十分に互いの思考を可視化しながら学習を進めていくために、ワークシート、思考ツール、付箋紙などのツールを活用し、話し合いの過程が残せるようにする。これらは教師にとっても各グループの状況を見取る一助となり、課題解決に向けての適切な支援につながるはずである。

教材文を読むこと、デジタルリーフレットを制作することにおいて、常に「写真から読み取ったことを文章に活かすこと」「伝えたい言葉を効果的に表す写真を選ぶこと」を何度も往復しながら、「より効果的に伝える表現」「写真と伝えたい言葉が合致した表現」について考えさせたい。

協働的な学習において ICT を活用して思考を可視化することで、コミュニケーション力を高めながら教科のねらいに到達していけると考える。

6 単元の計画

(1) 単元目標

重点化した指導事項「B 書くこと」ア 課題設定や取材 イ 構成

身の回りの大人の職業に対しての思いを知るために「職業リーフレット」をつくるという目的や、その相手に応じて、写真と文章を対応させながら説明する文章を書くことができる。

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (1)イ (ク)

指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと。

(2) 単元を貫く言語活動

書くこと ウ 「収集した資料を効果的に使い、説明する文章などを書くこと」

(3) 単元の評価基準

＜国語への関心・意欲・態度＞

- ① 進んで身近な職業についての資料を集めたり、聞き手の友達にとってわかりやすく伝えようとしていたりしている。

＜書く能力＞

- ② 関心のある職業から書くことを決め、紹介する文を書くうえで必要な事柄を調べることができる。ア
② 書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと」(B 書くこと 記述 ウ)

＜言葉についての知識・理解・技能＞

文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くことができる。 伝国 (1) イ (エ)

(4) 指導計画 (全18時間 本時16時)

1次	2次	3次
① 10歳になった自分たちの成長から「おとなになるということ」について考えを交流する。 ② 「アップとルーズで伝えよう」「仕事リーフレットを作ろう」の二つの単元のつながりを考え、この一年間に4年2組に力を貸してくださった様々な職業の方々を想起し、職業を説明するリーフレットを作成し、読み合おうという学習課題をもつ。 ③ 「アップとルーズを伝える」を読み取って「説明のコツ」を見つけながら、それを活用してリーフレットを作るという学習計画を立てる。 ④ 「仕事リーフレットをつくろう」を読んで、「取材のコツ」を見つける。教師の作例を参考にして学習の見通しをもち、取材の計画を立てる。	④⑤⑥自分が調べたい職業について調べて、質問を計画しインタビューなどの取材活動をする。⇒情報の収集 ⑦ 「アップルーズで伝える」を読み文章の大体をとらえる。 「アップ」と「ルーズ」の意味を読み取る。 ⑧ 「アップ」と「ルーズ」の長所と短所を読み取る。 ⑨ 写真と文章の対応させた書き方 対比した書き方から、筆者の説明の工夫を読み取る。	⑩ リーフレットにアップとルーズで対比して書く内容 や写真を選ぶ。⇒情報の選択 ⑪⑫筆者の説明の工夫を活かしてリーフレットの下書きをする。 ⑬⑭⑮ リーフレットを制作する。 ⑯作った物を見合って検討し、修正する。 ⇒情報の伝達 (本時) ⑰他の班のリーフレットを読み合う。 ⑱学習を振り返り、大人の職業への思いについて考えたことを出し合い、交流する。

<リーフレットで取り組む職業>

- ① 養護教諭
- ② 給食調理員
- ③ 横浜市立盲特別支援学校 教諭
- ④ 学校事務職員
- ⑤ 横浜市消防局 通信指令員
- ⑥ 神奈川県警 菊名池交番 巡査
- ⑦ 学校司書
- ⑧ タブレットやアプリケーション等を貸与してくださったメーカー担当者
- ⑨ 妙蓮寺にここ商店街 café 茶寿 オーナー
- ⑩ ヨークマート妙蓮寺店 店長

<保護者>

保護者に学級通信等を通じて学習過程を示しながら進めていく。

感想を寄せてくださったら、場合によっては掲載するなどしてシェアしていけるよう協力を仰ぐ。

今回は取材対象にはしないが、職業観や働いている気持ちなども、子どもの発言などから取り入れていきたい。その際、人権意識をもって取り組み、十分に理解を求めることとする。

7 本時

(1) 本時目標

身の回りの大人の「職業に対する思い」を伝えるという目的に合わせて作ったリーフレットを読み合い、写真と文章の対応の整合性や、全体の構成について修正をすることができる。

(2) 本時展開

学習活動と内容	評価規準＜評価方法＞ ○指導の手立て ◎活動をねらいにつなげる主な「しかけ」
1 本時のめあてを確認する。 学習を進めるために、見通しをもつこと	○学習計画表を掲示し、いつでもめあてや活動を確認できるようにする。
「職業リーフレット」の文と写真の組み合わせがぴったり対応しているか読み直し、完成させよう	
2 例に示した写真選択の観点をもとに、候補のなかから写真を選ぶ。 観点に沿って、根拠を示しながら選択すること 本気度を伝える観点例 ・ 文章の記述と写真が合っているか。 ・ 対比的な段落構成になっているか。 ・ アップとルーズのどちらが適切か。 ・ その職業、その人ならではの工夫を伝えているか。 ・ その人の仕事への思いを具体的に伝えているか。 3 結論が出せないグループや、選択に時間がかかったグループの事例を取り上げ、全体で交流する。 自分の考えを説明すること 4 本時の振り返りを行う。 それぞれが根拠をもって決めたことを確認すること 5 次時の学習の見通しをもつ。 ・ 互いのリーフレットを見合い、働く人の本気について考えていくという見通しをもつこと	○ タブレットのなかに保存している写真が並べて比較できるようにしておく。 ○ 書いた文章に合わせ、アップ、ルーズなどの写真を2～3枚に絞っておく。 評価規準①（書） 友達に自分たちが調べた「職業の特徴」と、「調べた相手の本気の思い」を伝えるため、写真と文章が適切であるかについて、観点をもとに意見を出し合い、修正したり、選択したりしている。 ◎ 気付きを書いた付箋を原稿用紙に貼りながら改善点について話し合えるようにする。 ○ 困っていることを全体に相談できるように促し、共有しながら考えられる場面を作るようにする。 ◎ 児童のタブレット端末から電子黒板に作品を転送し、全体で共有する。 ◎ 迷っている点、選択の決め手となった点を他のグループに予想させて思考を促すことができるようにする。 ○ 子どもが見出した新たな視点や、目的に合致した選択を価値づける。 ○ 学習のゴールをイメージしながら、それぞれの活動が次時の学習へつなげられるようにする。

授業の視点

- ・ 本時のねらいを達成するための ICT 活用ができていたか。
- ・ ICT がコミュニケーション力を高めるための手立てとなっていたか。

8. 実践を通しての成果と課題

【成果】

○総合的な学習の時間、年間行事などにつなげた大単元の中で取り組んだことで、児童の目的意識・相手意識が強く、必然性のある活動を仕組んでいくことができた。単元名、学習計画、毎時間の流れやルーブリックも、児童の方から提案してくる姿が見られた。主体的に学ぶ姿が見られた。本時においては、児童はこの時間にやるべきことを明確にもち、めあてを決めていく様子が見られた。

○本単元の言語活動では、タブレット端末を活用した。いつも手元にタブレットを置いておく環境で児童は十分に機器に親しみ、「文具」として日常的に使いこなしている姿が見られた。活動の中で、紙の原稿用紙やワークシートがよいのか、タブレット端末のどのアプリがよいのかなど、そのときの自分にとって最適な手段を選択し学習を進めていくようになった。



○情報の収集（取材）・選択（編集・制作）・伝達（成果物）を計画的に豊富に盛り込む言語活動が可能になった。それらの活動を通して、必要に駆られ自然と肖像権・著作権などの情報リテラシーを学習することができ、その効果が大きかった。

○情報の収集・選択の場面は協働して、情報伝達の場面では個人の書く力をつけるための活動として取り組ませた。児童は互いの進捗状況を把握しつつ、目的に向かって適切なアドバイスをし合いながら進めていくことができた。教科のねらいを達成するためのコミュニケーション場面を多様に仕組んで行くことができた。これらの様子からICTがコミュニケーションを高める手立てとして有効に働いていたと言える。



○取材を通して写真、具体物などの資料を収集し、それらを協働して選別していくことを通して、児童は相手や目的に合わせた選択ができるよう考えを高めることができた。アップ・ルーズの特徴を生かした構成や記述のためにこれらの写真を活用しながら、文章と写真が密接な関連をもつものであることを意識できるようになった。

本時ではこのようなねらいを達成でき、写真と文章を照らしあわせることを容易にしたICT活用がそれらにつながっていたと言える。



【課題】

○来年度から、横浜市の小中学校では段階的にタブレット端末が導入されていく見通しである。

学校に40台という数を、

- ・ 教師が一人一台ずつ使用（一斉学習での提示としての場面）
- ・ 児童一人1台（個別学習の場面）
- ・ 2人に1台、4人に2台、班に1台（協働学習場面）

などの様々な学習場面において活用していくことが可能となる。

来年度からは校内全体の使用計画を整理し、授業のねらいによって様々な利活用ができるように調整していくことも必要になる。この方策も考えていきたい。

○本単元の活用は、タブレット端末を用いて、取材・編集・成果物作成までを行った。

今回は協働的な制作過程が、豊かなコミュニケーション場面を生み出していたが、やはり「書く活動」については、一人一端末の環境下が望ましい。

○タブレット端末の活用は制作ツール、発表ツールとして扱った。今後はさらに教科の思考場面での活用事例を増やしていきたい。

学級活動（２）指導案

指導者 藤原 直樹

1. 日時・場所

平成26年12月3日（水）5校時 （14:00～14:45）

2. 学年・組

第3学年5組 28名（男子11名、女子17名）

3. 活動名

学級カレンダー「かがやきの足あと」でクラスを高めていこう

題材名

自分が発信したメッセージを正しく相手に伝えるには、どんな言葉の選び方がよいのかな

場に応じた言葉づかい

内容（２） イ 基本的な生活習慣の形成

4. 活動の背景

（１）子どもの実態

<学級目標にかかわる子どもの実態>

本学級では、学級目標「かがやこう！！3の2」を掲げ、「おもいやる心」「友だちを大切にする心」「チャレンジする心」の3つの目指すべき姿をクラスの成長の視点としている。学級では年度初めから、日々の自分たちの学級の成長を共有するために、そして節目節目で確かめ合うために、自分たちが目指すべき姿を学級カレンダーに書き留めている。

前期は、帰りの会で数名の児童が「友だちのすてきな姿・ところ」として口頭で発表し、係の児童がそれを参考にして、学級カレンダーに書き留めてきた。後期からは、学級の一人一人が今まで以上に自分たちの成長の姿に目を向け、全員がそれを発信できるようになった。しかし、全ての成長の姿を発表し、共有することはできず、学級カレンダーに書き留めることもできないことが悩ましい問題であった。

本学級には、夏休み明けより1人1台のタブレット端末を使用できる環境とこれらを無線でつながるネットワーク環境が整備されたので、タブレット端末に一人一人が自分たちの成長を毎日書き込み、それを共有できるようになった。子どもたちは一人一人が、前期以上に自分たちが目指すべき姿を意識するようになってきている。

<本題材にかかわる子どもの実態>

一般に「コミュニケーション」とは、双方向のやりとりの中で形成されるものであるが、相手を想定して、自分が伝えたいことや発信したいことを何らかの形で表現することも「コミュニケーション」の形の一つととらえ、自分が発信したメッセージを相手に正しく伝えるための言葉を選ぶことができることが必要といえる。子どもたちは、国語科の学習をはじめ、多くの学習の中で、相手意識をもった発表を行ったり、互いの考えを言い合ったりしている。しかし、そのほとんどは相手を目の前にした対面コミュニケーションである。友達文章・書き言葉だけで、相手に自分の伝えたいことを分かりやすく正確に表現するという非対面コミュニケーションの場面は多くない。

また、情報機器を用いたコミュニケーションの実態としては、本学級の児童28名の内、13名が保護者から与えられた携帯電話を用いて、保護者とメールやメッセージのやり取りを行っている。現在は、親子という特定の関係の中で、ある程度、使用目的（「何時に帰る」「どこにいる」などの報告など）が制限された上で、文字による非対面コミュニケーションを行っているが、相手との関係性や目的が多様になったときも対応できるコミュニケーション力を身に付けることが必要となってくる。

（２）教師の思い・願い

子どもたちを取り巻く環境や実態から、今後は、学年が上がっていくにつれて、このような情報通信機器を用いての文字による非対面コミュニケーションを行う人数や機会が増えていくことが予想される。また、今現在は、そのやり取りは親子間であることがほとんどであるが、文字による非対面コミュニケーションの対象が親子やきょうだいから、友達や家族外の人と広がっていくであろう。

子どもたちは、学校生活の様々な場面で、他者との対人コミュニケーションをしているが、そのほとんどは会話によるものであり、話し言葉による対面コミュニケーションである。

対面のコミュニケーションでは、目の前の相手に対して、自分が伝えたいことを発信するときには、その表情や態度を見たり感じたりしながら、言葉を付け加えたり、言い換えたりすることができる。さらに、「あの」や「その」などの指示語とともに、指差したり、自身の動作や表情、声色などと合わせたりして表現をすることもできる。逆に、非対面コミュニケーションでは、自分が発信した文字や書き言葉からしか、相手は情報を得ることができないので、非対面コミュニケーションの特徴を知り、より適切な非対面コミュニケーションができる力を付けていく必要があり、非対面という場・環境に応じた言葉づかいができるようにしていきたい。

5. 活動のねらい

自分が発信したメッセージが正しく相手に伝わるには、どんな言葉づかいがよいのかを友達と一緒に考え、自分のめあてを決めて実践することを通して、場に応じた言葉づかいができる基本的な生活習慣を身に付けることができる。

6. 評価規準

(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全

集団活動や生活への 関心・態度・意欲	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるための自己の生活の充実と向上にかかわる問題に関心を持ち、自主的に日常の生活や学習に取り組もうとしている。	楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために、日常の生活や学習の課題について話し合い、自分に合ったよりよい解決方法などについて考え、判断し、実践している。	楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることの大切さ、そのための健全な生活や自主的な学習の仕方などについて理解している。
イ 基本的な生活習慣の形成		
集団活動や生活への 関心・態度・意欲	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
自己の生活上の問題に関心を持ち、学級の一員としての自覚をもって、意欲的に日常の生活や学習に取り組もうとしている。	日常の生活や学習における課題について話し合い、きまりを意識しながら自分に合ったよりよい解決方法などについて考え、判断し、実践している。	きまりを守りながら、日常生活を気持ちよく送ることの大切さ、そのためのよりよい生活や学習の仕方について理解している。
○本活動の評価規準		
集団活動や生活への 関心・態度・意欲	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
1日の学校生活で見つけた学級の成長の姿を、共有するために、どのような言葉の選び方をすればよいのかに関心を持ち、意欲的に学習に取り組もうとしている。	1日の学校生活で見つけた学級の成長の姿を、共有するために、どのような言葉の選び方をすればよいのかについて考え、判断し、実践している。	多くの人に自分から情報発信するときには、場に応じた言葉の選び方があることを理解している。

7. 本時のねらい

学級カレンダー「かがやきの足あと」へ記載するメッセージについて、例文を改善する活動を通して、メッセージが正しく相手に伝わるには、どんな言葉の選び方がよいのかを友達と一緒に考え、基本的な生活習慣（場に応じた言葉づかい）を身に付けることができる。

8. 本時の展開

流れ	子どもの活動と内容	教師の支援
事前	[問題の共通化] ○クラスの成長のためには、「かがやきの足あと」の文章を、相手に正確に伝えることが必要だという共通の問題意識をもつ。	・学級カレンダーに自分たちの姿を残していくことの意義を、児童全員がとらえられるように、いつでも目に行うことができる掲示を行う。
本時	[話し合い・自己決定] 1. 本時の学習課題を確認する。 メッセージを正しく相手に伝えるには、どんな言葉のえらび方がよいのかな 2. 教師が用意したメッセージの例文を読み、正しく分かりやすく伝える言葉に換える。 ・教師が用意した例文をテレビ画面に映し、児童全員で共有する。 <例文の問題点> ・主語がない。 ・言葉が不足している。 ・場面や状況によって、捉えられ方が変わってしまう言葉がある。 ・二重否定の文になっている。 ・教師用タブレットからグループ毎に異なる例文を配信する。 ・配信された例文を読み、正しく分かりやすく伝える言葉に換える。 3. 一人一人が修正した言葉づかいを基にして、グループでの最適解を決める。 ・一人一人がタブレット上で修正した文章・言葉を基に、グループでの最適な文章・言葉を決定して、教師用タブレットに送信する。 4. グループ毎に修正した文を全体で共有し、分かりやすく伝えるために大切なことを考える。 <言葉のえらび方> ・主語を書く。 ・ぬけがないように書く。 ・ぐたいてきに書く。 ・短い言葉で書く。 5. この時間で学んだことから、自分のめあてを決めて、今日のメッセージを書く。	・メッセージの例文は教師が作成し、情報の不確かさや曖昧さに目が向く例文を扱う。 ・これまでの子どもたちの記述文章の中で、内容が伝わりにくくなっていたときの「言葉の選び方」を基にして、例文を作成する。 ・グループ（4人）で同じ例文を考えることで、例文の問題点に気付いたり、改善のためにどんな言葉の選び方がよいのかについて考えが広がるようにする。 ・元の文は黒板に掲示し、グループ毎に考えた最適な文章・言葉はテレビ画面に投影して、比較できるようにする。 ・例文の問題点を改善することで、これからの自分たちの行動（言葉の選び方）の具体的なめあてにする。
事後	[実践] ○「言葉の選び方」のめあてに向けて取り組む。 [振り返り] ○自分たちのメッセージが伝えたいことが伝わる文章になってきていることを知る。 ○めあてについて振り返り、これからも続けていこうとする	・自分が決めためあてを掲示し、日常的に意識できるようにする。 ・タブレットに書き込んだ日々のメッセージを定期的に一覧で振り返り、自分のメッセージが自分の伝えたいことが伝わる文章になってきていることを確かめる時間を確保する。

9. 成果

○ 本時のねらいを達成するためのICT活用ができていたか

- ▷ 日々の自分たちのふり返りを記録・保存し、いつでもその情報を取り出すことができることで、自分たちの成長の変容に目を向けるよさがあった。
- ▷ 編集や共有が速く、書いたものを基にグループでのコミュニケーションができるよさがあった。
- ▷ 学習課題が一人ひとりに配信されることで、子どもたちは自分の課題として捉え、課題に意欲的に取り組むことができていた。
- ▷ 子どもたちへの課題の配信と教師への集約が素早くでき、情報の共有がタブレット端末によって素早くできるので、授業展開がスムーズに進められた。
- ▷ 子どもたちは、自分が「発信」した言葉が、それが学級内で「共有」されたり、タブレット端末内や学級カレンダーに「保存」されることを通して、一つの「情報」となるという認識がもてるようになった。このことは、自分が「発信」した「情報」の適切な扱いへの気づきになった。
- ▷ 児童から収集した情報を一覧表示したり、個別の児童の情報を掲示したりするには、提示する情報の切替が容易である大型テレビ&無線型画面転送機&タブレット端末の組み合わせが効果的だった。一方、学習の中で情報を残しておきたいものについては、黒板を使用する必要がある。情報に応じた、大型テレビと黒板の使い分けが効果的に行えた。

○ 本時が非対面コミュニケーションの育成につながっていたか

- ▷ 子どもたちは、自分が「発信」した言葉が、それが学級内で「共有」されたり、タブレット端末内や学級カレンダーに「保存」されることを通して、一つの「情報」となるという認識がもてるようになった。このことは、自分が「発信」した「情報」の適切な扱いへの気づきになった。
- ▷ 学びが子どもたちの生活に生きてつながるような取組にしたことで、「情報」に対して、当事者意識を持って考えることができていた。
- ▷ 子どもたちの中には、面と向かって話せないことでも、文字に書いたり、タブレット端末に書き込んだりするような非対面コミュニケーションの手段では、自分を素直に表現できる場合もある。適切な非対面コミュニケーションの方法を習得することで、よりよい対面コミュニケーションの構築につながることも感じられた。

10. 課題

- ▷ 機器のメンテナンス大変。SEの常駐が必須である。
- ▷ 一人一台良かったか。二人で一台でコミュニケーションをはかるのもありではないか。
- ▷ 有効に活用できていたが、集団思考の自己決定には落としきれていなかった。学級活動のねらいの達成のためには、過去の発言をいかすことも必要
- ▷ 対面と非対面のバランスの良いコミュニケーションが必要。
- ▷ グループでの練り上げが課題。修正が分かる工夫がいる。送られたものに先生はレスを返すのか？
- ▷ 「やばい」、「すごくない」など、日本語表現にない言葉をどう指導するのか。どの教科にもはまらない指導をどうしていくか。
- ▷ 集中は10分が限度。注目させたい時は、ロック機能を使うなど集中させる使い方が必要。

Ⅵ 横浜市小学校教育研究大会・二次大会

平成27年2月4日

フォーラム南太田

平成26年度横浜市小学校教育研究大会・二次大会
情報・視聴覚教育研究大会

1 はじめの言葉 平野成昭 校長（希望ヶ丘小）

2 研究会挨拶 田中公明 校長（森の台小）

3 役員紹介

運営：平野大二郎（庄戸小）

司会：東森清仁（常盤台小）

記録：鈴木輝美（滝頭小）

講師：横浜市教育委員会指導企画課 主任指導主事 松田裕

4 研究発表

【今年度の研究について】

今年度も、中川一史先生（放送大学）の図をもとにコミュニケーション力のアップと授業のねらいを達成するための授業を考えてきた。そこで、思考ツールとタブレット端末の活用の二本の柱を立てて取り組んできた。公開授業研究会では横浜市の現状をふまえ、委員会と話し合いながら使用することにした。今後は第2期横浜市教育振興基本計画に沿って考えていくようにしたい。

公開授業研究会では思考のプラットフォームとしての ICT として、子どものからみ、ゆらぎの場を使い、それぞれの部会で二つの討議の柱を立てて協議を行った。

【授業デザイン部会】

「教育メディアを効果的に活用し、コミュニケーション力を育む授業デザイン」

東汲沢小 吉田圭一

港北小 近藤 睦

5月は、デジタルとアナログの融合ということで、タブレットと大型テレビとの親和性、6月はシンキングツール（アナログ）を使った子どもの見取り方、7月の 中川先生の講演からは、タブレットの動的なツールとしての価値を学んだ。One of them としての教具と考え、タブレットと既存の道具を使い分けて子どもの思考が大切という話をいただいた。

【公開授業研究会の振り返り】

○「アップとルーズで伝える」「リーフレットを作ろう」（国語）

単元の導入で、大人になることについてイメージマップを作ることによって観点が絞れた。今回デジタルリーフレットにしたよさは、情報の収集・選択の部分で出ると 思っている。また、動画を取り入れることは 4 年生の発達段階としては難しいが、視覚障がいの方にも伝えられるという、紙のリーフレットではできない音声での伝達というところも試みた。当日は、写真と文の検討を行うということで、適切なアプリとしてロイロノートを使い、4 枚のスライドをつなげたものをデジタルリーフレットとし、中の部分の 2 枚をアップとルーズで伝えることとした。子どもたちが、自分たちが作ったものを見直したり他のグループの子からアドバイスをもらったりして、目的に合わせて文を直したり段落を変えたりとすぐに修正し、残したいことは付箋に残すという姿が見られた。

デジタルリーフレット作りでは、3つの情報活用能力のフェーズを取り入れやすい構成にし、必要感をもって力をつけていくことができた。

ー成果として感じられたことー

①ねらいについて

☆PC よりも子どもが使いこなしている。文字の入力の際はキーボードをくっつけて PC のように入力している子もいた。

☆情報の共有、整理のしやすさが大きかった。

②コミュニケーション力を高めるための手立てになっていたか

☆PC よりも気軽に文字を打てるため、自分の考えを文字化しやすい。

☆アドバイスしやすくなることで教え合いを促進していた。

☆日常でも使っていたので、上達が早く、また、教え合いを自然にするようになっていた。

→タブレットはコミュニケーションを促すツールになっていた。

<まとめ>

講師よりも、タブレットは動的なツールとなっていたという言葉をいただいた。失敗した時に、必要性にかられた情報モラルツールになったので、日頃から使い、文具的ツールとなっている必要がある。また、コミュニケーションの場を作り、力を育むために、思考ツールを活用した思考の見える化は有効であり、活用するための授業デザインが必要である。

<授業デザインのイメージ>

目指す子どもの姿+情報の3つの柱+言語活動

⇒ICTは目指す子どもの姿に近づくための潤滑油となるのではないかな。（特にタブレットは1つのツールで色々できる）

○来年度に向けて

たとえ、アナログであっても有効であるのでは？と考えるようにしたい。また、今後もコミュニケーション力に注目するだけでなく、21世紀型学力を視野に入れた研究を行っていきたい。

【スキルアップ部会】

「教員のICT活用能力のスキルアップをめざして」

今宿小 伊藤先生

西富岡小 藤原先生

スキルアップ部会では、教員のスキルアップを特にねらいとして取り組んできた。教員のスキル、環境、アイデアが子どもたちのコミュニケーション力アップにつながるとして研究をしてきた。タブレット端末は、教室にしながら世界につながり、相手に伝えることができるというツールである。4月には中橋先生の講演から、学習の目的を意識してタブレットを使うということを教えていただいた。5月～9月は、タブレットシンク、デジタルペン、ロイロノートの体験や活用例の紹介を通して、現時点で使える機器、アプリを知ったり、それぞれのメリット、デメリットを学んだりすることができた。

【公開授業研究会の振り返り】

今までテレビや新聞からの情報の受給者だったのが、情報の発信者にもなる時代になった。子どもたちにどのような対応力をつけるかが求められている。何か問題が起きた時ではなく、事前にコミュニケーションを育成する必要があると考え、先行指導してみた。また、仮想場面等を通してではなく当事者意識をもたせていきたいと考え、4月から取り組んでいる学級カレンダーを使い、1人1台タブレットを利用し、メールや掲示板等での利用を想定して授業をデザインした。（高ではないけど、皆が見られるものだからどういう言葉を使ったらいいか考える指導が必要）

ー成果として感じられたことー

☆ICTを使うことで、日々の重なりが生まれ、振り返れるようになった。

☆テキストだけではなく、写真に文字を重ねて発信する子も出てきた。

☆非対面をめざすことで、コミュニケーションが生まれた。

→これを繰り返すことで、対面コミュニケーションにも良い影響が出てくるのではないかな。

☆配信されることで、自分ごととしてとらえられた。

☆書くことで、自分の素直な思いを伝えることができるようになった。（子どもの感想から）

→子どもが自分の発信に責任をもつようになったのではないかな。

<まとめ>

非対面の注意点をどのように教えるか、タブレットをどう使うかを検討した。子どもが日常的に使うことで、タブレットの使用に慣れていて、タブレットがあったからこそ、子どもたちが自分ごととしてとらえられたのではないかな。子どもたちにとって操作が容易であったし、発表には使いやすいので、発言力がついた。しかし、タブレットは色々なところで活用できるが、「ねらいを達成する」ということは外してはいけななし、まだ通信が不安定という課題がある。コミュニケーション力の育成については引き続き研究を重ねていく必要がある。

5 指導講評

部会構成が2つ（①②の両方に取り組んでいる）と
言うのがとてもよい。

学習の中でのコミュニケーションをプラットフォームとして研究を進められているということが重要。そして、協働学習の核となるICT（タブレット活用）

＜情報化の3つの柱＞

- ①各教科でのICTの利活用
- ②情報教育
- ③校務の情報化（委員会が担当）

に取り組んでいるのがありがたい。横浜市としては無線が使用できないので、タブレットをどう使うかが難しいが、閉じられた世界でLANをつないで授業を行ったことが今後につながるのではないかな。

ー藤原級の授業からー

電子黒板だけ、黒板だけ一でも駄目で、見せて消すもの、残すものを使い分けていて、両方がうまく融合されていた。教師の役割として、PCがタブレットに変わったことで、先生が自由に移動できるようになり、子ども全員を見て、困っている子に助言ができるというメリットが生まれた。子どもがテレビ画面に集中できるのは10分ぐらいなので、見せる場面、作業させる場面の切り替えが必要。見せる場面では、タブレットの画面をOFFにするなどができるとういのではないかな。

ー近藤級の授業からー

4人に2台のタブレットを上手に使い、教え合って学習していた。協働学習では、①みんなでやる②分担してやるの②パターンがあるが、近藤級は①を行っていた。教師が教えるのではなく、子どもたちが教え合って学んでいくというところで、協働学習の片鱗が見られる授業だった。

タブレットが、One of themとして、学習道具の1つになる。授業のねらいに合わせて、ある時は〇〇、ある時は△△といったように、学習に合わせてツールを選んでいく域まで根付いていくことが大切。そういうことができるような研究になればいいと思う。

来年度は、方面毎小中1校ずつ（計8校）に各校40台のタブレットが配当される予定。

6 終わりの言葉

田中芳夫 校長(長津田第二小)

VII 各区の研究活動

旭区視聴覚・情報教育研究部(平成26年度)

1 研究主題

より身近で手軽に誰でも使用できる情報機器活用について

～ TV・OHCなどの活用を通して ～

2 研究経過

	月 日	研究・研修内容	会場
①	4月16日(水)	役員選出、研究テーマ確認、年間計画検討	希望ヶ丘小学校
②	5月21日(水)	年間研究計画確認 講演「情報モラルについて」 講師:希望ヶ丘小学校 平野 成昭 先生	希望ヶ丘小学校
③	6月18日(水)	実践提案①(南本宿小学校) 朝倉 慶顕先生 「視聴覚機器の活用と学習効果について(社会)」	希望ヶ丘小学校
④	7月16日(水)	「実物投影機みエルモン・かけるもんを使った 授業スタイル」研修	希望ヶ丘小学校
⑤	8月19日(火)	実技研修「学習の効果を高めるためのOHCの活用」	希望ヶ丘小学校
⑥	9月17日(水)	実践提案②(中尾小学校) 坂井 亮太先生 「とびっこあそび『みんなでジャンプ!』」	希望ヶ丘小学校
⑦	10月22日(水)	実践提案③(左近山小学校) 井寺 慎也先生 「ほると出てくるふじぎな花」	希望ヶ丘小学校
⑧	11月12日(水)	指導案検討(東希望が丘小学校)	東希望が丘小学校
⑨	12月17日(水)	指導案検討(東希望が丘小学校)	東希望が丘小学校
⑩	1月28日(水)	区一斉授業研究会(東希望が丘小学校) 第4学年 松村 祐希先生 「4年2組の詩のアンソロジーを編もう ～好きな詩のよさをクラスの人に伝えよう～」 第5学年 中澤 朋子先生 「あなたに見えた色はどんないろ? ～長谷川潔さんの作品を鑑賞し感じたことを伝え合おう～」	東希望が丘小学校
⑪	2月25日(水)	年度末反省・次年度の方向性について	希望ヶ丘小学校

3 まとめ

今年度は、今ある学校の情報機器を中心に日々の授業実践につながるICT活用を意識して、実践提案や実技研修を進めてきた。毎月、多くの先生が発言し、活発な話し合いがされてきた。また、各学校との情報交換を密に行い、情報共有を行ってきた。

研究の視点として常に以下の三点を意識して研究を進めた。特に一斉授業研では、①と②の視点について追究することができた。

- ① 学習意欲を高める教材の提示 ～ 喜びや感動を生み出す教材提示 ～
- ② 学習効果を高め、学びを支援する視聴覚機器や教材の活用 ～ 視聴覚機器の効果的な利用 ～
- ③ 学習の個別化と視聴覚機器の利用

鶴ヶ峯小学校 矢澤 太陽

神奈川県情報・視聴覚教育研究部

1 研究テーマ

「情報・視聴覚教材・機器に親しみ、互いに伝え合い、高め合いながら学ぶ子の育成」

～言語活動の充実の手立てとしての情報・視聴覚機器の活用について～

2 研究経過

月・日	会場	内容
4月16日	子安	○役員選出、年間計画検討
5月21日	三ツ沢	○実践提案（三ツ沢）「インターネットでの書き込みのし方を考えよう」 ○情報交換（斎藤分）「情報モラル教育の取り組み」
6月18日	神奈川	○実践提案（菅田）「ICTを利用した子どもたちの伝えあい」 ○情報交換（神奈川）「授業の中でのICT機器等の活用」
7月16日	神橋	○実践提案（青木）「書画カメラ（みえるもん）とペンタブレット（かけるもん）を使った理科の観察」 ○情報交換（神橋）「デジタルコンテンツと実物投影機の活用」
8月19日	子安	○実技研修「電子黒板の活用について」
9月17日	白幡	○実践提案（子安）「社会科学習でのOHCの活用」 ○情報交換（白幡）「タブレットの利活用について」
10月22日	羽沢	○実践提案（中丸）「パワーポイントを使った様々な実践」 ○情報交換（羽沢）「ジャストスマイルの活用について」
11月19日	西寺尾	○指導案検討
12月18日	西寺尾	○指導案検討
1月28日	西寺尾	一斉授業研 3年 「おどる光、遊ぶかげ、これいいね！！」（図画工作） 6年 世界の中の日本「世界は」～世界と結びつく日本～
2月25日	二谷	○まとめ、次年度の研究体制について

3 まとめ

「授業などですぐに役立つような内容」を意識しながら実践提案を行った。その結果、研究授業だけでなく、参加者が普段の授業でも活用できる実践的な内容となった。

情報交換では、各校の校務での工夫・校務で困っていることを中心に取り上げた。各校の職員室やパソコン室の工夫を紹介してもらうため、会場は情報交換を担当する学校にした。今年度は校務システムや端末の入れ替えについての情報交換も充実させ、悩みを共有しあい、特に成績処理については、研修や成績処理の方法、各校のあゆみの様式について活発に情報を交換した。紹介された方法を後日実践する学校もあり、充実した情報交換であった。

授業研究では、授業者が情報・視聴覚教材・機器の活用について工夫し計画的に支援していくことで、子どもたちがお互いに教えたり、伝え合ったりして学ぶことに情報機器が有効に活用できるかが討議された。また、文字入力やプレゼンテーションソフトの活用等、情報・視聴覚機器の操作のスキルアップを各学年の実態、発達段階に合わせて系統立てて行っていくことの必要性についても意見交流が行われた。

来年度も「研究授業に役立てる」「すぐに実践できる」という視点で実践提案や情報交換を行い、参加者が授業や校務に生かせる内容の研究をしていきたい。

平成26年度 西区情報・視聴覚研究会 研究報告

1 研究主題

『主体的な学びにつながる情報機器の活用』

前年度は、同様の主題のもと、情報機器が授業のどの場面で使用されるのか、情報機器が活用されることで、子どもがどのように変わるのか、どのような効果があるのかを、実際の授業をもとに考えた。

今年度は、「主体的な学びにつながる」ことを意識して、前年度の情報機器の活用場面をより具体的にしていきた。理解を深めるための活用、コミュニケーション能力を高めるための活用など、情報機器の利用方法や目的、使用するタイミングを模索していくことで、子どもたちの主体的な学習につなげていくことができるのではないかと考え、研究主題を設定した。

さらに、近年の情報化社会の中では、小中学生の携帯電話やインターネットの利用が高まり、問題も生じている。あふれる情報の中で子どもたちが情報によって被害に遭わないために、また、加害者にならないためにも、情報モラルについての研修、情報の共有を進めてきた。

2 研究経過

月	研究内容	提案校	提案内容
4月	研究主題・研究計画		今年度の研究主題・研究仮説の決定
5月	実践提案①	浅間台小・宮谷小	・透過型スクリーンの活用 ・デジタルカメラを活用した授業実践（国語・体育） ・情報モラル（携帯電話）
6月	実践提案②	戸部小・西前小	・情報モラル（インターネット・携帯電話） ・デジタルカメラを活用した授業実践
7月	実践提案③	一本松小・稲荷台小	・デジタルコンテンツを活用した授業実践（算数） ・情報モラル（インターネット）
8月	実技研修（情報モラル）		（講師） 神奈川県警本部少年育成課 少年相談保護センター係長 田崎博也様 『SNSトラブルの現状と防止について』ご講演
9月	西・中区合同一斉研指導案検討	平沼小	・デジタルカメラ・電子黒板・書画カメラを活用した授業実践（算数） ・デジタルコンテンツ・実物模型を活用した授業実践（社会） ・SNSトラブルの模擬体験ソフトを活用した授業実践
10月	西・中区合同一斉研指導案検討	平沼小	同上
11月	西・中区合同一斉授業研究会	平沼小	同上
12月	実践提案④	東小	・ステラシアターを活用した授業実践（理科）
1月	実践提案⑤	富士見台小	・iPadを活用した授業実践
2月	研究のまとめ		・研究成果と課題、次年度に向けて

○各校1回ずつ実践提案を行い、子どもが学習への理解を深めたり意欲を高めたりする教師の活用方法を中心に検証を進めた。

○情報交換の時間を設定し、校務システムをはじめ、ホームページの運営についてなど多岐にわたって各校の情報を共有できるようにした。

3 まとめ（○成果 ●課題）

○子どもが課題解決をする効果的な手立てとして、教師が視聴覚機器を提示したり活用したりすることができた。

○情報モラルを取り上げる授業実践を通して、正しい知識を身につけ、そこから思考力や判断力を高め、日常生活に生かしていこうとする子どもと姿が見られた。

●今後導入される可能性が高いタブレット端末の活用方法の在り方や教育的価値について、具体的な子どもの姿を想像しながら研究を進めていきたい。

瀬谷区情報・視聴覚教育研究部

1 研究主題

自ら学ぶ力を育てるための学習の展開
～多様なメディアを活用した情報活用能力の育成～

2 研究経過

月	日	内容	会場校
4	16	年間計画作成 役員決め 役割分担 部長	瀬谷
5	21	実践・実技提案(相沢小学校) 「実物投影機の利用実態(報告)とより効果的な活用方法」 古賀 誠先生 吉田 直好先生 *ELMO社による実物投影機活用研修	相沢
6	18	実践提案(上瀬谷小学校) 「各教科での視聴覚機器を用いた指導の工夫」 瑞慶覧 周 角田 勇人 大木 洋平先生	上瀬谷
7	16	実践提案(阿久和小学校) 「都道府県と視聴覚機器の活用(個別級)」 大津留 義弘先生 「図工におけるNHK for school の活用」 勝村 佑輔先生	阿久和
8	19	実践提案(瀬谷小学校) 「インターネットサイトを用いた学習について」 大野 真司先生 「委員会活動における視聴覚機器の活用」 辰野 経先生 「漢字学習における視聴覚機器の活用」 浅野 敬嗣先生	瀬谷
9	17	授業研事前検討会①(南瀬谷小学校) 社会科「食料生産とわたしたちの暮らし」 ～考えよう わたしたちの未来の食たく～ 船山 桜子先生	南瀬谷
10	22	授業研事前検討会①(南瀬谷小学校) 社会科「食料生産とわたしたちの暮らし」 ～考えよう わたしたちの未来の食たく～ 船山 桜子先生	南瀬谷
11	19	区授業研究会(南瀬谷小学校) 社会科「食料生産とわたしたちの暮らし」 ～考えよう わたしたちの未来の食たく～ 船山 桜子先生	南瀬谷
12	17	実践提案(大門小学校) 6年社会「開国が日本にもたらしたもの」 視聴覚機器を用いた授業の展開 久松 篤先生	大門
1	28	実践提案(原小学校) 2年算数「新しい計算を考えよう(かけ算)」 ペンタブレット(かけルモン)を活用した授業展開 東川 智先生	原
2	26	研究のまとめ 次年度に向けて 部長	瀬谷

3 まとめ

今年度も昨年同様の研究テーマで実践・実技提案を通しての研究を行った。

実践・実技提案校が、それぞれ日頃の実践をもとにした提案を行ことによって、参加者それぞれが各校において日常の学習の中でそれを活用・応用しながら、自分の学級・学校に反映させることにもつながった。提案の内容が実物投影機やパソコンに入っているソフト、インターネットサイトなどの活用と、どの学校のどのクラスでも取り組み可能な内容が多く、現在の学習にすぐに取り入れることができたことがよかった。

また、事務処理の効率化を図るための校務システムについてや、校務パソコンなどについての各校の取り組みについても情報交換を行った。

これからの課題としては、タブレット PC の活用実践や情報モラル教育の面でも実践事例や課題についての検討を積み重ねることが、少しずつでもできればよいと考える。

次年度からも引き続き、自ら学ぶ力を育てる学習展開のための情報活用能力の育成の実践研究に取り組み、工夫を図っていきたい。

瀬谷さくら小学校 諏訪 浩

H 2 6 年度 港南区視聴覚・情報教育研究部

1. 研究テーマ

「子どもが情報を活用し、主体的に学ぶ姿を目指して」

2. 研究経過

今年度は6校の実践提案、2校の実技研修、講演会を行った。実践事例の提案後は情報交換の時間を設け、各校の状況を参考にする時間とした。

月 日	内 容		会 場
4月16日	年間計画提案 役員選出		桜岡
5月21日	実践提案	算数 「パワーポイントを用いた九九のアレイ図」(南台) 総合・社会「テレビ会議を活用した授業提案」(南台) 社会「ICT事例集をつかった授業提案」(日野南)	南台
6月18日	実践提案	「Windows7へのアップグレード」(港南台第三) 総合「高取山の植物を知ろう」(港南台第一)	港南台第三
7月16日	実技研修	「小型ホワイトボードを使った授業活用方法」(吉原)	吉原
8月19日	実技研修	「ハイスピードデジカメを使った授業活用法」 「LANを使ったタブレット講習」 「学校用グループウェア(ミライム) 学校業務支援ソフト」 「デジタルペン」(下永谷)	吉原
9月17日	実践提案	「デジタルカメラの活用」(丸山台) 「学校で使えるウェブページ」(野庭すずかけ)	丸山台
10月22日	講演会	「情報セキュリティと情報モラルについて」 講師：LINE株式会社	下永谷
11月19日	一斉授業研究会指導案検討会① 全体会		港南台第二
12月17日	一斉授業研究会指導案検討会② 部会別		港南台第二
1月28日	港南区一斉 授業研究会	1年 算数「ずをつかって かんがえよう」 4・5組 生活単元「おもいでスライドショーをつくろう」	港南台第二
2月25日	本年度反省、次年度計画(予定)		芹が谷南

3. まとめ

今年度も昨年度に引き続き、「子どもが情報を活用し、主体的に学ぶ姿を目指して」をテーマに研究を進めてきた。子どもが情報を受け取り、いかに活用して思考を深めるのか、どのように新たな情報を発信するのか。そして、それを支援するための教師の役割やICT機器の活用について、具体例をもとに話し合うことができた。課題も多いが、「明日から取り組むことのできる」研究ができたように感じる。また、各校の情報・視聴覚機器の管理・設定・運用方法などについても話し合う時間を設け、情報の取り扱いや校務システムの運用状況について意見交換を行うことができた。

また、10月に行ったLINE株式会社による「情報セキュリティと情報モラルについて」の講演会では、実際にスマートフォンを使って、子供たちのLINE上でのトラブルを擬似体験したり、LINE株式会社作成によるネットモラルリテラシー教材を学んだりするなど、有意義な場となった。

金沢区情報・視聴覚教育研究部

研究テーマ

主体的に情報をつかみ、意欲的に情報を生かして学習していく児童を目指して

研究経過

月 日	内 容	会 場
4月16日	年間計画・役割分担	釜利谷東小
5月21日	実践提案①釜利谷南小 ・お昼の放送あれこれ ～放送委員会の常時活動～	釜利谷東小
6月18日	実践提案②並木第四小 ・携帯電話教室の開催について ・児童用デジタルカメラの使用について	釜利谷東小
7月16日	実践提案③西柴小 ・パソコンクラブの活動について	釜利谷東小
8月19日	実践提案④小田小 ・学校で使えるような視聴覚機器のいろいろ	釜利谷東小
9月17日	実践提案⑤並木中央小 ・児童向けに使えるようなツールについて	釜利谷東小
10月22日	一斉研指導案検討	文庫小
11月19日	区一斉授業研究会 ・1年算数「ひき算」 ・6年体育「目指せ！マットマスター」器械運動	文庫小
12月17日	実践提案⑥高舟台小 ・タブレット端末を使った授業づくり	釜利谷東小
1月28日	実践提案⑦釜利谷東小 ・電子黒板・実物投影機	釜利谷東小
2月25日	研究のまとめ・次年度役員決定	釜利谷東小

まとめ

〈成 果〉

児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、適切に活用できるよう、視聴覚機材や教育機器などの教材・教具の適切な活用方法を研究してきた。早晚全市に導入されるであろうタブレット端末の活用方法について詳しく学んだことが収穫であった。区一斉授業研究会では、9月の研究会にお招きした業者さんのご協力により、タブレット端末を用いた授業を行い、よりよい活用について話し合うことができた。

〈課 題〉

子どもたちが自分にとって必要な情報を主体的に収集・判断・処理し、発信・伝達できる能力を身につけていくために、ICTの力を借りるとよいことは私たち指導者が得てきた実感である。とはいえタブレット端末については、一部の教員が私的なデバイスを授業で利用しているのが現状である。文部科学省が実施している学びのイノベーション事業において提唱されている「一人一台の情報端末や電子黒板、無線LAN等が整備された環境」を実現していくために、ICT、とりわけ「一人一台の情報端末」の有用性を他の職員や教育委員会事務局に訴えていくことが大切である。また、それらが導入された時に備えて、従来の授業のどのような場面で活用していくかについて、さらなる研究を深めていく必要がある。

泉区情報・視聴覚教育研究部会

1 研究主題

「視聴覚・情報メディアを効果的に活用し、児童が主体的に学習する姿をめざして」

2 研究経過

	内容	会場
4月16日	役員紹介、組織年間計画	中田
5月21日	実践提案① 総合的な学習の時間「幼稚園・保育園の先生にチャレンジ」：発表ソフトの活用 実技研修① ムービーメーカーの活用	緑園西
6月18日	実践提案② 家庭科「自分で朝食を作ろう」：デジタル教科書や電子黒板、OHCの活用 実技研修② 実物投影機の活用 情報交換会①	葛野
7月16日	実践提案③ 社会「武士の政治と鎌倉幕府」：デジタルカメラ・OHCの活用 実技研修③ 情報モラル研修「今時の子どもたちのネット・ケータイ」	西が岡
8月19日	実技研修④ 電子黒板の設定、操作（業者による研修） 情報交換会②	岡津
9月17日	実践提案④ 情報モラル教育「携帯電話のマナーとルール」 実技研修⑤ word・excelの活用	いずみ野
10月15日	実践提案⑤ パソコン室のレイアウト・パソコンクラブの運営について 実技研修⑥ 発表ソフトの活用	和泉
11月19日	一斉授業研究会 指導案検討① 情報交換会③	下和泉
12月17日	一斉授業研究会 指導案検討②	下和泉
1月28日	一斉授業研究会 4年 算数 「変わり方」：Excel やテレビ、OHCの活用 5年 図工 「『その場』くん登場」：デジタルカメラの活用	下和泉
2月25日	研究のまとめ、次年度に向けて	中和田南

3 まとめ

◆一年間の研究の成果及び課題

〈成果〉

「実践提案」と「実技研修」、「公開授業および研究協議会」の3つを柱として研究会を行った。「実技研修」は、昨年度末の反省を生かして、学校に配当されている情報・視聴覚機器を活用した内容にして、授業や業務ですぐ実践・活用することができた。

一方、「実践提案」および「一斉授業研究会」では、国語、算数、理科、社会、図画工作など、様々な教科の事例や授業の提案となり、様々な場面での情報・視聴覚機器の活用方法を学ぶことができた。

また、年度途中に研究主題について見直した。具体的には研究範囲を拡大し、「子どもたちの情報活用能力の育成」と「各教科等の目標を達成するための効果的なICT機器の活用」の二つを柱とし、様々な視点からの実践提案や実技研修を通して、研究が深めることができた。

〈課題〉

課題は大きく2つある。一つ目は、「子どもたちの情報活用能力の育成」をねらいとした実践例がまだ数が少ないことである。二つ目は、実技研修や実践提案の内容について似たものが多くなり、研究に深まりがなくなっている。日々の指導や業務に生かせることを重視しつつも、内容の改善・充実をはかっていく必要がある。

横浜市立中和田南小学校 伊藤 雄太

平成26年度 港北区情報・視聴覚教育研究部 年間活動報告

1. 研究主題

「わかる・楽しい授業のための教育メディアの効果的活用法を探ろう」

～学びを深め、広げる情報・視聴覚教育～

2. 研究経過

月	日	内容	司会校	記録校	会場校
4	16	総会(研究テーマ・年間活動計画・役員選出) ／役員打合せ	区幹事	区幹事	矢上小
5	21	実践提案① 提案校(大曽根小) 視聴覚機器を活用した授業実践 委員会活動におけるICレコーダー活用	菊名小	小机小	大曽根小
6	18	実技研修会① 企画校(矢上小) 自作ソフトウェアの紹介と活用	北綱島小	駒林小	矢上小
7	16	実践提案② 提案校(師岡小) デジタルカメラのムービー機能活用 デジタル教科書活用	港北小	篠原小	師岡小
8	19	実技研修会② 企画校(新田小) 情報セキュリティ研修	菊名小	小机小	新田小
9	17	実践提案③ 提案校(矢上小) フラッシュ教材授業実践	北綱島小	駒林小	矢上小
10	22	実技研修会③ 企画校(駒林小) フラッシュ教材体験研修	菊名小	篠原小	駒林小
11	19	指導案検討会①	港北小	小机小	菊名小
12	17	指導案検討会②	北綱島小	駒林小	菊名小
1	28	区公開授業研究会(菊名小)	港北小	篠原小	菊名小
2	25	1年間のまとめ・次年度の活動についての確認	区幹事	区幹事	矢上小

3. まとめ

昨年度末にとられたアンケートにもとづき、「研究主題が適切であった」との多くの声により、今年度も、昨年度と同じ研究主題を設定し、引き続き研究を深めていくことにした。そのアンケートには、「すぐに実践できる情報機器の活用」と「情報(ネット)モラルの指導」の要望が多かったが、今年度はその要望に沿った提案・研修ができた。特に授業研究会においては、高学年の情報モラル指導の授業を公開し、指導の内容やそのあり方を検討できた。

平成26年度 磯子区 情報視聴覚研究部

磯子区部長 汐見台小学校 脇野 航平

1. 研究テーマ

「児童の情報活用能力を高める指導のあり方」

2. テーマ設定の理由

児童は、学習活動の中で様々な「情報」を得る。そのとき、次のことを指導の視点としてもたなければならない。

「必要な情報を選択できているか。」

「得た情報を整理できるか。」

次に、情報を外部に発信する（活用する）際は、次の点についても指導の視点としてもたなければならない。

「機器等の操作の技能があるか」

「情報モラルについての知識はあるか」

情報活用能力は社会に出てから欠かすことのできない力であり、その基礎はやはり小学校から指導すべきであると考えます。

そこで、上記のテーマを設定し、

各教科・領域、総合的な学習の時間の中において、児童が様々な情報に触れる場面で、どのような指導が必要か。（情報選択、モラルの指導）

児童が学習の手段として、情報機器を適切かつ効果的に活用できるためには、どのような指導が必要か。

という、2つの視点で考察を行い、研究を進める。

3. 活動内容

日程	内 容	会 場	備考・提案校
4 月 17 日	役員確認・年間計画確認	汐見台小	旧役員
5 月 21 日	研究テーマ決定	屏風浦小	役員
6 月 18 日	実践提案①	屏風浦小	屏風浦小・杉田
7 月 16 日	実践提案②	屏風浦小	梅林・岡村・根岸
8 月 19 日	実技研究	未定	役員
9 月 17 日	実践提案③	屏風浦小	浜小・さわの里・山王台
10 月 22 日	実践提案④	屏風浦小	滝頭・洋四・森東
11 月 19 日	指導案検討①	磯子小	磯子小
12 月 17 日	指導案検討②	磯子小	磯子小
1 月 28 日	一斉授業研究会(磯子小)	磯子小	磯子小
2 月 25 日	平成 26 年度の研究のまとめ	屏風浦小	役員

4. まとめ

本研究会では、情報活用能力の育成についての研修や各校の情報教育指導計画の紹介、各校における実践例を持ち寄って情報・意見の交換をし、より効果的な指導方法について考察することを中心に活動した。教師が機器を扱うのではなく、子供が情報機器に使用する際の指導法や使用するというテーマは、それぞれの提案でもしっかりと意識され、部員の意識が統一できた。一方もう一つのテーマである情報モラル教育については提案が少なく、来年度はそちらに重点を置いて研究を進めてもよい。夏の研修では、今後導入されるであろうタブレット端末につながるタッチペンや校務運用ソフトハイスピードカメラの紹介を行い、実際に使用してみることで今後の情報機器のとらえ方、扱い方のよい見通しをもてた。授業研究会では、子供が機器を扱う場合、あくまで学習目標を達成するための手段として扱わせること、機器の指導は積極的にプロの方、地域の方を招いて行うこと、情報機器という定義のとらえ方、機器を扱う前の子供の素地を育てる重要性などが話題になり次年度の研究に生かせる有意義な研究会になった。

1 研究主題

児童自ら学び取る力をつけるための情報メディアを生かした学習のあり方

～ICT 機器の効果的な活用と、情報モラルの育成～

2 研究主題設定の理由

昨年度は、「児童自ら学び取る力をつけるための情報メディアを生かした学習のあり方」という研究主題をもとに、実践・提案・実技研修が行われた。定点カメラを使った植物の観察、ソフトウェアを活用した授業展開、カメラの動画機能を活かした児童のビデオ制作など、どの提案内容もすぐに実践できる内容が多く、「児童自ら学び取る力」へとつながる研究となった。また副題でもあった「携わる者すべてのスキルアップ」では、校務システムの本格的活用に伴い、不安要素があるなか、世話人校長の田中先生や徳江先生のご助言、各学校の取り組み状況や活用して見えてきた問題点などを情報交換する中で各校のスキルアップへとつながった。

青葉区では、ここ数年、情報のスキルアップをめざし、情報機器の学習のあり方についての研修を進めてきた。幅広い研究を進めてきたことで多様化されてきた情報機器にも慣れ、補助教材として情報機器が大いに活躍できる場を設定できてきたように思われる。

そのような活動結果を経て今年度のスタート時に部員にアンケート調査を行い、今年度の方向性を調査した。

その結果昨年度の研究主題設定の理由の一つであった「情報モラル」について深めていきたいという声が多く、研究主題の副題として添えることとなった。情報モラルとは、「情報社会を生きぬき、健全に発展させていく上で、すべての国民が身につけておくべき考え方や態度」である。（参照：文部科学省ホームページ 第5章 情報モラル教育より）

情報社会では、一人一人が情報化の進展が生活に及ぼす影響を理解し、情報に関する問題に適切に対処し、積極的に情報社会に参加しようとする創造的な態度が必要である。そのような子の育成をめざし研究を進め、情報教育のねらいである「情報社会に参画する態度」の育成、ひいては「情報の科学的な理解」「情報活用の実践力」の育成につなげていきたい。

また校務システムに至っては、今年度も昨年度の流れを継承し、校務における情報化のスキルアップへとつながられるよう、情報の共有化を図りたい。

3 研究内容

- テーマにそった授業実践を通して、効果的で実践的な学習方法を探る。
- 情報機器の活用に関わらず、他教科と関連付けながら情報モラルにつながる実践例を提案する。
（必ず情報モラルにおける実践提案・研究授業を予定の中に入れる。）
- 講演会を通して、情報モラルについて学び、指導力へとつなげる。
- 他教科と関連付けながら ICT 機器の効果的な活用を探る。
- 授業に役立つ実技研修を取り入れる。

4 年間活動計画

日程	内容①実践提案または実技提案	内容② 現状報告・情報交換	司会 記録
4/16 (水)	役員引継ぎ 年間計画 新役員紹介 日程 研究主題 (田奈)		部長校担当
5/21 (水)	『情報モラルの育成について』 講師 もえぎ野小学校 徳江 武司 校長		つつじが丘 山内
6/18 (水)	実践提案 (もえぎ野) ・電子黒板を使った授業実践 「たんぼのちえ」	現状報告 校務システム運用状況 (嶮山)	さつきが丘 奈良の丘
7/16 (水)	『横浜版 ICT スタンドアードについて』 北部学校教育事務所 板倉 千鶴指導主事による講演会		鉄 つつじが丘
8/19 (木)	実践提案 (美しが丘西) 実物投影機を使つての授業展開 ～算数科『あわせていくつ ふえるといくつ』～	現状報告 成績処理について (鴨志田第一)	荻田西 鴨志田緑
9/17 (水)	実践提案 (元石川) ・フラッシュソフトを用いた音読劇 ・タブレット端末の実践 (美しが丘東)		新石川 桂
10/22 (水)	一斉授業研 指導案検討 (市が尾)		一斉研 担当幹事校
11/19 (水)	一斉授業研 (市が尾小にて)		一斉研 担当幹事校
12/17 (水)	実践提案 (藤が丘) (5年 道徳) ・家庭科での動画活用について ・ツイッターやLINEでの新しい課題	現状報告 ウィンドウズ7への移行と 問題点 (あざみ野第一)	荻子田 あざみ野第一
1/28 (水)	実践提案 (みたけ台) ・情報モラルについて	現状報告 校務システムの運用について (東市が尾)	黒須田 あざみ野第二
2/25 (水)	まとめ/年間反省・次年度役員選出 (田奈)		部長校担当

5 まとめ

青葉区情報・視聴覚教育研究会では「児童自ら学びとる力をつけるための情報メディアを生かした学習のあり方」をテーマに研究を行ってきた。子どもたちが情報社会の危険性を理解し、情報社会を主体的に生き抜く力を身につけられるような実践提案がなされ、多くの議論を通して、研究を深めることができた。校務システムについては、校務における情報のスキルアップへとつながられるように、研究会を現状報告や意見交換の場として存分に活用し、情報の共有化を図ることができた。

(文責 発 すすき野小学校 山田 勝重)

平成26年度

鶴見区情報・視聴覚研究会

1. 研究主題

「視聴覚機器の積極的活用・情報活用の実践力を高める学習」のあり方

～ICT 教育の環境整備を通して～

2. 研究経過

月 日	内容	提案校
4/16	組織作り 年間計画検討	
5/21	年間計画の決定 情報交換	
6/18	実技研修①	豊岡小学校 「デジタル教科書等の活用」
7/16	実践提案①	鶴見小学校 「社会科での視聴覚機器の活用」 寺尾小学校 「国語科での視聴覚機器の活用」
8/19 夏 期	実践提案②	入船小学校 「筆談パットの活用」 下野谷小学校 「体育科のねらいに近づくための 、録画機能の活用」
9/17	実技研修②	市場小学校 「オリジナルの動画をつくろう」
10/22	実践提案③	下末吉小学校 「タブレット PC の活用」 矢向小学校 「インターバルレコーダーの活用」
11/19	鶴見区公開授業研究会指導案検討①	岸谷小学校 2年生：体育「どうぶつなりきりマットランド」 5年生：特別活動「そろえるってどういうこと？」
12/17	鶴見区公開授業研究会指導案検討②	
1/28	鶴見区公開授業研究会	
2/25	研究のまとめ 役員選出	
27年4/	27年度 年間計画・部員紹介等	

3. まとめ

「視聴覚機器の積極的活用・情報活用の実践力を高める学習」のあり方を主題に、1年間研究を積み重ねてきた。視聴覚機器が日々進化を続けていく中で、新しい機器を新しい視点で教師が活用していくスキルを身につけていくとともに、子どもたちが教科・領域の目標を達成するために活用していくことが大切であるとする。視聴覚部員だけが使えるのではなく、どの先生も授業の中で使えるように、これからも部員が広めていく必要がある。一方で、校務システム、新規PC等にも対応できるように、研究会としても情報交換等を密にして取り組んでいかなければならない。

末吉小学校

福田 博章

平成26年度 都筑区情報・視聴覚教育研究部

1 研究主題

「主体的に情報をつかみ、情報を生かして学び合う子の育成」
～豊かな学びにつなげる ICT 機器の活用と情報モラルの育成～

2 研究経過

月 日	内 容	提案校	会場校
4 / 1 6	年間計画・役割分担		北山田小
5 / 2 1	☆実践提案① 【放送委員会の活動について】	すみれが丘小	北山田小
6 / 1 8	☆実践提案② 【実物投影機を活用した授業実践】	川和東小	北山田小
7 / 1 6	★実技研修① 【情報教育のスタンダード】 【教育ソフト「キューブキッズ」について】	都田小	北山田小
8 / 1 9	★実技研修② 【CCAS コントローラの活用】 【「ポケモン PC チャレンジ」の紹介】	南山田小	北山田小
9 / 1 7	☆実践提案③ 【豊かな心を育む放送教材の活用】 ●指導案検討①	茅ヶ崎小 荏田南小	北山田小
1 0 / 1 5	●指導案検討②	荏田南小	荏田南小
1 1 / 1 9	●一斉授業研究会	荏田南小	荏田南小
1 2 / 1 7	☆実践提案④ 【学校ホームページ CMS の活用】	荏田小	北山田小
1 / 2 8	☆実践提案⑤ 【行事における視聴覚機器の活用】 【Windows8 の活用】	都田西小	北山田小
2 / 2 5	年度のまとめと次年度の方向性について		北山田小

3 まとめ

本年度も研究テーマのもと、学習場面に焦点を当てて子どもたちがより主体的に学習できるように効果的な ICT 機器の活用や、子どもたちが生活環境の中から、自ら情報を得たり、それらを選択・活用したりする等の能力を育てていけるような方法についての研究を進めてきた。どの場面でのように ICT 機器を活用していくことで子どもの学習や活動の深まりにつながるかを検討するなど、とても有意義な研究を行うことができた。今後も変化し続ける情報環境に対応しながら情報を共有していきたいと思う。そして、子どもたちの学びを深め、高めることができるように、「人と人とのつながり」や「学びと学びのつながり」を大切にした学習の狙いを達成するために ICT 機器を効果的に活用していきたい。さらに、情報モラルの育成について、実践提案や情報交換等を通して来年度も研究を進めていきたい。

平成26年度

南区情報・視聴覚研究会

1. 研究主題

「ICT 機器を活用した、子どものわかりやすい授業をめざして」

2. 研究経過

月 日	内容	提案校
4/16	役員選出・年間計画等検討役員	
5/21	年間計画等確認（役員） 情報モラル授業、視聴覚機器の整備の現状についてなどの情報交換	
6/18	実技研修① 年間指導計画などの情報交換	蒔田小学校 「タブレットの機能を授業にどう活用できるか」
7/16	実技研修② パソコン室や委員会活動の情報交換	石川小学校 「スグキク・イマキク」「F9Ⅱ」「mitaka」の紹介
8/19 夏 期	実技研修③ 校務システム等の情報交換	六つ川西小学校 「学校ホームページの最適化～改善と運用」
9/17	実践提案①	永田台小学校 「ネチケットを扱った道徳の授業」
10/15	実践提案② 南区公開授業研究会指導案検討（相談会①）	六つ川小学校 「運動会放送担当について」
11/19	実践提案③ 南区公開授業研究会指導案検討（相談会②）	六つ川台小学校 「電子黒板の活用について」
12/17	南区公開授業研究会指導案検討	南太田小学校
1/28	南区公開授業研究会	南太田小学校 1年 大倉 みどり教諭 4年 佐 埜 健教諭
2/25	研究のまとめ （研究集録作成、成果と課題等）	
27年4/	27年度 年間計画・部員紹介等	

3. まとめ

学校に配当されたり、または各校で購入したりした校務用パソコンや書画カメラ、デジタルカメラ、フリーソフトなど、様々な機器をどのように活用すればテーマに迫ることができるか研究を深めた。

各校から提案された内容は、すぐに実践できるものが多く、有意義な研究会になった。

1月の授業研究会では、デジタルカメラと書画カメラを使った授業が提案された。1年生では、児童の手元をデジタルカメラで撮影し、撮った画像をすぐにパソコンに取り込み、大型テレビで全員が共有することができた。4年生では書画カメラを活用し、児童が作ったいろいろなパターンの展開図を見合い、良い点やうまくいかなかった点などを話し合うことができた。

今後も日々変化していく情報機器の活用や情報モラルの指導などについて研究を進めていきたいと考える。

別所小学校 野尻 亮

栄区 情報・視聴覚教育研究部

1 研究主題

一人ひとりの子どもが、主体的な学びを高めるための情報・視聴覚教育

～考える力・表現する力を育む情報教育のあり方～

昨年度の研究を受け、今年度も引き続き、情報・視聴覚機器を活用し子どもの思考力、表現力の育成をしていくことに焦点化して研究を進めていく。思考力や表現力については、その重要性が叫ばれるようになって久しい。各教科研究においても様々な実践が行われ、その成果が報告されているところである。そうした各教科における研究成果を参考にしながら、そこに情報・視聴覚機器を加えることによって、より効果的な学習活動を展開することができるであろう。機器の特性に基づいた活用方法・活用場面など、本研究会がこれまで蓄積してきた研究成果や、研究会員各位の知識・経験を基に、子どもの思考力・表現力を充実させるための研究を進めていきたい。

また、「校務システム」についても、各校で実際に運用する中で発生する疑問点や課題点について情報共有しながら、必要に応じて講習会、研修会などを適宜設定し、情報・視聴覚担当職員の互助支援の場となるようにしていきたいと考えている。

2 研究経過

月 日	活動予定	担当	司会	記録	会場
4月16日	・ 研究組織づくり ・ 研究主題、年間活動計画の検討	前部長	前部長	—	本郷
5月21日	・ 視聴覚・情報教育機器、教材、情報教育指導計画についての情報交換	笠間	千秀	飯島	本郷
6月18日	・ 実践提案・実技研 〔① 小山台 〕	小山台	桂台	庄戸	本郷
7月16日	・ 実践提案・実技研 〔② 小菅ヶ谷〕	小菅ヶ谷	上郷	千秀	本郷
8月19日	・ 夏季実技研修会	本郷台	公田	豊田	本郷
9月17日	・ 実践提案・実技研 〔③ 西本郷 〕	西本郷	小菅ヶ谷	西本郷	本郷
10月22日	・ 実践提案・実技研 〔④ 豊田 〕	豊田	庄戸	桂台	本郷
11月19日	・ 実践提案・実技研 〔⑤ 千秀 〕	千秀	小山台	上郷	本郷
12月17日	・ 実践提案・実技研 〔⑥ 庄戸 〕	庄戸	桜井	公田	本郷
2月25日	・ 研究のまとめ ・ 次年度の研究方針検討	笠間	豊田	小菅ヶ谷	本郷

3 まとめ

今年度は、各教科においてそれぞれの活動目標を実現するためにどのように機器を活用していくかをテーマに研究を進めてきた。本時において、教師の機器を用いるタイミングや方法等について、そしてそれによって子どもたちがどのように目標達成に向けて考え、表現していたのかを中心に細かく全部員で討議することができた。

また、研修や提案に加えて、情報・視聴覚担当職員の互助支援の場として校務システムを中心とした情報交換の場を多く設定した。運営・活用していく中での悩みや活用法を共有することができた。

(横浜市立笠間小学校 浦川裕貴)

緑区情報・視聴覚教育研究会活動計画

1. 研究主題

自ら学び続ける子どもを育てるための、情報・視聴覚教育メディアをいかした学習の推進
～明日の授業に役立つ教材・機器の活用～

2. 研究経過

月／日	主な内容	提案（C）	実技研修（B）	司会（D）	記録（D）	会 場
4／16	研究主題検討 年間活動計画検討	区幹事		区幹事	区幹事	新治
5／21	実践提案・情報交換（運動 会放送）	鴨居 三保		中山	山下	森の台
6／18	実践提案・情報交換（校内 組織・視聴覚部業務）	いぶき野 長津田		中山	山下	森の台
7／16	実技研修・情報交換		森の台	東本郷	中山	森の台
8／19	実技研修・情報交換		竹山	東本郷	中山	森の台
9／17	第1回区一斉授業研指導 案検討（活動計画）	山下		霧が丘	東本郷	山下
10／15	第2回区一斉授業研指導 案検討（本時展開）	山下		霧が丘	東本郷	山下
11／19	区一斉授業研究会	山下		区幹事	区幹事	山下
12／17	実技研修・情報交換		山下みどり台	山下	霧が丘	森の台
1／28	実技研修・情報交換		十日市場	山下	霧が丘	森の台
2／25	研究のまとめ・反省 来年度役割分担確認	区幹事		区幹事	区幹事	森の台

3. 研究経過

〈成果〉

今年度は理科に役立つウェブサイトや機材やパソコンクラブで使いやすいソフトの紹介など、まさに研究テーマにある「明日の授業に役立つ」内容だった。また、民間企業によるタブレット型端末の講習を受け、操作方法やこれからの展望を知ることができた。これからの教育現場の変化を見据えた内容に、参加者からも活発な意見の交換がなされた。

〈課題〉

新しく導入された学校ホームページ作成ソフト「CMS」の操作方法の実技研修が行われたが、情報発信と個人情報の保護との両立が今後さらに重要になってくると思われるので、今後も研究会での情報交換と各学校での周知徹底をしていく必要がある。

平成26年度 戸塚区情報・視聴覚教育研究部 研究報告

1. 研究テーマ

「一人ひとりが情報を活用し、主体的に学び、関わり合う子の育成」
～ICT 機器の効果的な活用を通して～

2. 研究経過

実施日	内 容
4月16日	研究計画
5月21日	○実践提案（東汲沢小） 最近の情報・視聴覚主任に求められること
6月18日	○実践提案（汲沢小） （1）道徳：「たったひとつのたからもの」 （2）社会：「ごみをへらそう」
7月16日	○実践提案（南戸塚小） 算数：『「対称な図形」における「点対称な図形」』
8月19日	○実技研修（株式会社 教育ネット） 教職員向け情報モラル研修 「小学生におけるインターネット利用の実態と学校での指導の在り方について」
9月17日	○区一斉授業研究会 指導案検討1回目：活動計画（俣野小）
10月22日	○区一斉授業研究会 指導案検討2回目：本時展開（俣野小）
11月19日	○区一斉授業研究会（俣野小） （1）内田 美穂先生 2年国語：おうちの人におしえよう わたしのおも ちの作り方 （2）重永 高志先生 6年社会：新しい世の中へ～俣野のまちの移り変わり～
12月17日	○実践提案（品濃小） （1）「学校」で取り組むホームページ作成について （2）Excel を利用した週案について （3）子どもが自ら考え、創り出す動画
1月28日	○実践提案（倉田小） （1）算数：「20 よりおおきいかずをかぞえよう」 （2）総合：「かかわりを大切に～ふれあい2013～」
2月25日	○研究のまとめ

3. まとめ

4月当初からの課題として、情報・視聴覚部員の ICT 機器の活用に関しては、今までの研究で深まってきているが、それを他の教員や、子どもたち一人ひとりのおとしていくにはどうしたらよいか、という点が挙がっていた。さらに、視聴覚の機器に頼るだけでなく、情報そのものを活用していくことも大事なのではないか、という意見も挙がっていた。

5月の最初の提案では、職場での一人一台のパソコンが当たり前になり、今情報・視聴覚主任が何を求められているか、という視点から、今後の、各職場での情報・視聴覚主任としての在り方を見通すことができた。その後も、ICT 機器の活用を通して、子どもたちがより主体的に学習に取り組み、互いの思い・考えを伝え合うことができるような提案が行われた。8月に行われた実技研修では、昨今何かと話題になっている「ライン」や「ユーチューブ」など、子どもを取り巻く情報モラルの実態を学び、体験することができた。実際にタブレットを使ったり、ラインを体験してみたりと、実践的な内容で、改めて情報モラルについての早期学習の必要性を感じるとともに、私たち大人側がついていけないにに対して、今後も引き続き研究・研修が必要であると感じた。

一斉研の授業では、ICT 機器の活用に留まらず、年度当初から課題に挙がっていた、「情報の活用」に対してもアプローチした授業が行われた。教師は「情報を与えられる」だけでなく、「与えられた情報をどう活用していくか」という視点を子どもに提供した。そして、子どもは教師の期待に応え、与えられた情報をもとに、主体的に学ぶ姿が見られた。子どもたち同士がお互いに関わり合い高め合う、素晴らしい授業になった。

今後も、研究主題にあるような、子ども一人ひとりが主体的に学べるような場を、情報・視聴覚の視点からどう作っていきけるかを、教師自身が広い視野をもって考えていきたい。そして、その活動を限定的ではなく、多くの教師や子どもに広めていけるような活動も行っていきたい。

平成26年度 中区視聴覚・情報教育研究部

1. 研究テーマ

子どもが意欲的に学習に取り組むための
効果的な視聴覚機器の活用をめざして

「視聴覚機器」を使うことで学習効率が上がる場面を中心に研究を進めてきた。実際の学習の場面で視聴覚機器を使用することによって、どのような効果があり、児童の理解が深まったかについての提案が多くあった。また、情報モラル教育についての実践も数多くあり、各校に広めることができた。今年度は情報交換の時間を多くとり、各校の児童用パソコンのルールや放送委員会の様子など知ることができ、その情報を自校で生かすことができた。

2. 研究経過

月・日	内 容	提 案 校	司会・記録	会 場	月・日	内 容	提 案 校	司会・記録	会 場
4・16	研究計画・組織	元部長校	北方	北方	10・22	西・中合同指導 案検討	平沼小学校	西区幹事	平沼
5・21	実践提案 実技研修など 放送委員会の情 報交換	附属小学校	元街	附属	11・19	西・中合同授業 研究会	平沼小学校	西区幹事	平沼
6・18	実践提案 実技研修など 職員室用PCの 情報交換	大鳥小学校	本牧	大鳥	12・17	実践提案 実技研修	本町小学校 山元小学校	山元	本町
7・16	実践提案 実技研修など	本牧小学校 元街小学校	大鳥	元街	1・28	実践提案 実技研修	間門小学校 北方小学校	本牧南	北方
8・19	実践提案 実技研修など パソコンクラブ の情報交換	立野小学校	附属	立野	2・25	まとめ	幹事校	幹事	立野
9・17	実践提案 実技研修など 児童用PCの管 理の情報交換	間門小学校 本町小学校	元街	本町					

3. まとめ

〈成果〉

昨年度に引き続き、同じ研究テーマのもと、「視聴覚機器」を使うことで学習効率が上がる場面を中心に研究を進めてきた。日から使えるスキルとして蓄積されていった。情報モラルについても取り上げ、情報交換が行えた。パソコンクラブや放送委員会、機器管理についての情報交換の時間を多くとることができ、他校の取り組みを参考にして活動できた。

〈課題〉

携帯電話をもつ児童が多くなり、情報モラル教育の必要性が増している。

また、各校の現状（視聴覚機器の保有状況・校務システム等）について情報交換の時間をもっととったほうが良かった。

横浜市立北方小学校 堀 幸仁

保土ヶ谷区情報・視聴覚教育研究会 平成 26 年度活動計画

1、研究主題

「使う 深める 活用する情報教育」～情報活用能力の高まり～

2、研究主題について

全校に大型テレビ等が配当され、パソコンの台数も学習に必要な台数がほぼ整ったといえる。子どもたちは、ますます情報化する社会の中で育つこととなる。情報機器をどのように扱うか、様々な情報から適切な内容を取り込むことができるかがこれからの子どもには必要となる。

また、教師側もこの情報化社会の中では、情報機器の扱いに十分に慣れ、指導をしていく必要がある。教師は、学びの場が広がるような教材を見つけたり、作ったりしながら子どもたちの学習意欲を引き出していくことが大事である。そのために情報・視聴覚機器が学習の場でどのように活用できるかを研究の主題として取り組みたい。そのためには、情報モラルをしっかりと身につけることと機器に十分慣れ親しむことが欠かせない。十分に行うことで、大切さや良さに気付くことができると考える。学習でのモラルの指導や各学年で必要とされる能力（情報教育計画）をしっかりと行い、学習の展開につなげていく。そうすることで、学習に対しての深まりにもつながると考える。モラルを守り、様々な機器の扱いの中で、スキルアップにつながるだろうと考える。さらに、教育の情報化を受けた取り組みについて情報を集めたり、校務に関わる内容を軽減したりする研修を進めたりして区としての共通理解や情報交換の場を設け、研究を進めていきたい。

3、研究内容

上記主題を次のような内容で具現化を図る。

(1) 実践研究

- ・各教科領域等での実践事例を中心に行う。

(2) 視聴覚担当者のための情報交換

- ・校内運営の情報を提供する。
- ・Excel、ビデオ編集、校務システム等の情報の提供
- ・実技研修を通して各個人のスキルを高める。
- ・具体的な悩み事相談に答えていく。
- ・授業研究会に役立つ情報を収集する。

(3) 授業研究

- ・授業での機器の活用だけでなく、児童が様々な情報をいかに活用して課題を解決していくかということについて研究を深める。
- ・区研究会の総力をあげて、授業研究会に取り組む。

4、研究方法

○研究主題に沿って実践提案をし、それをもとに参加者で討議を行う。

- ・授業実践の提案を行い、指導案を用意する。
- ・具体的な機器や機材があるとよい。
- ・問題提起としての提案をする。

○視聴覚情報教育に必要な実技研修を行う。

- ・新しい機器やソフトウェアの操作技術または活用方法を研修する。
- ・音楽や画像・動画編集、HP 作成などの技術研修を行う。

○研究会の内容や研修内容を記録（USB）し、視聴覚だよりとして発行し、次の B 研までにまとめる。

データは、USB に記録して、副部長に渡す。

○紀要原稿は記録をもとに作成する。（CD-R に記録する）

5、研究のまとめ

今年度の活動は、「授業実践」と「教師のスキルアップ」の観点から研究に取り組んできた。

「授業実践」については、それぞれの提案者から、「機器を用いて児童の理解を促すもの」、「情報そのものの扱いについて考えるもの」「機器の活用そのものが学習となるもの」などが提案された。

「教師のスキルアップ」については、理科実験器具や書写DVDの活用など幅広い分野において、授業の実践的な取組の紹介に加え、動画編集やタブレット操作など学習をサポートする部分についての研鑽も深めることができた。

今後、さらに児童を取り巻く情報化社会の変化を見据え、学校教育として何が求められ、何ができるのかを考えながら、より発展的・効果的な研究活動に取り組んでいきたい。

平成 26 年度 保土ヶ谷区情報・視聴覚研究部 研究日程及び活動内容

月 日		活動の種類や名称	役割		会場	主な内容／分担／その他
			司会	記録・広報		
4	16	年間計画	副部長①		帷子	組織決定・年間計画作成 研究主題検討
5	21	実技研修①（藤塚） 実践提案①（保土ヶ谷）	副部長②	星川	帷子	ソフトによるイメージマップ作り フリーソフトの活用等
6	18	実技研修②（仏向） 実践提案②（瀬戸ヶ谷）	副部長②		帷子	ウィンドウズ7アップグレード 書写DVDの活用
7	16	実技研修③（坂本） 実践提案③（境木）	副部長②		坂本	ジャストスマイル5の活用 実物投影機の活用
8	19	夏季研修	副部長②	峯	帷子	携帯電話の安全マナー
9	17	実技研修④（今井） 実践提案④（初音ヶ丘）	副部長①	新井	帷子	動画編集ソフトの活用 銀ROMの活用等
10	22	実技研修⑤（権太坂） 実技研修⑥（常磐台）	副部長①		常磐台	デジタル生物顕微鏡による学習 タブレットの活用
11	19	指導案検討①（川島）	副部長①	笹山	帷子	指導案検討
12	17	指導案検討②（川島）	副部長②		川島	指導案検討
1	28	区一斉授業研究会（川島）	副部長②	桜台	川島	生活科「大きくなったね」 図工「ちょきちょきぴたっと心のアート」
2	25	年間のまとめ			帷子	年間のまとめ

部長	・研究会会長との連絡・調整	岩崎
	・区評議会の出席、計画書提出	
	・各係との連絡、調整	
副部長①	・一斉研の統括・紀要作成・広報の統括、市紀要編集	帷子
副部長②	・研修、実践提案・夏季研修の総括	上菅田
副部長③	・案内・出席管理・会計	上星川
記録・広報・紀要	・毎回開催される研究会の発信、データ化して副部長に渡す	星川 桜台 新井 峯 笹山
一斉研	・一斉授業研	川島
実技研修	・部員から出た要望を受け、研修を立案、運営 6校	仏向 藤塚 権太坂 今井 常磐台 坂本
実践提案	・実践提案 4校	保土ヶ谷 初音が丘 境木 瀬戸ヶ谷

メディアワールド

横浜市立小学校

情報・視聴覚研究主任様

横浜市小学校教育研究会

情報・視聴覚教育研究部会員様

平成26年度 4月号

【発行】

横浜市小学校教育研究会

情報・視聴覚教育部会

会長 渡邊 和也



ICT が拓く子どもの学び～タブレット端末の活用～

武蔵大学社会学部メディア社会学科教授 中橋雄先生

4月23日(水)、今年度、最初の研究会を行いました。定期総会後に、武蔵大学の中橋先生をお迎えして、講演(「ICT が拓く子どもの学び～タブレット端末の活用～」)をしていただきました。現場での実証研究を中心にお話いただき、今後の ICT 環境について、様々なことを改めて考えるきっかけとなる講演会でした。

印象に残った言葉は「“タブレット”は子どもにとって世界にひらかれた窓」です。つまり、教室にいながら、自分の課題解決のため、より相手に分かりやすく伝えるために、すぐに世界と繋がる(自分の論の根拠となる資料など

を探せる)ことができ、さらに無限の方法で、アナログだけでは実現できない伝え方(色や太さ、レイアウトなど)を実現できるということです。学習指導要領でも、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに～」とあります。タブレットはまさにこのような課題に対し、使い方次第でかなり有効的なツールになることが分かりました。また、中橋先生は、「タブレットを使ったからと言って、テストの点数は上がらない。でも、どうすれば相手により伝わるか、課題を解決していく思考力、判断力、表現力を身につけることができる。」ともおっしゃ

っていました。タブレットという便利なツールの機能に振り回されるのではなく、「何を学ばせたいのか。」「どんな力を身につけさせたいのか。」という学習の目的があつての『タブレット』だということを意識して使っていかなければなりません。

昔であれば異様だった光景も今では、自然なものになっています。(2005 と 2013 のコンクラーベの写真)今後、ICT の力をさらに発揮していくために、本研究会でも、教育の目標・授業デザイン・教師の授業力という条件を整えていけるよう、研究を進めてまいります。

【次回予告】 5月7日(水) 15:30～

「タブレット端末を活用した学習スタイルの体験型学習」

～タブレット端末クライアントソフトの活用～

パイオニア株式会社の方にご協力いただき、タブレットを利用したグループワークを体験します。お持ちの方はタブレット端末をお持ちください。もちろんなくても構いません。詳しくは、研究会案内をご覧ください。



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
(青葉区 鴨志田緑小学校)

メディアワールド

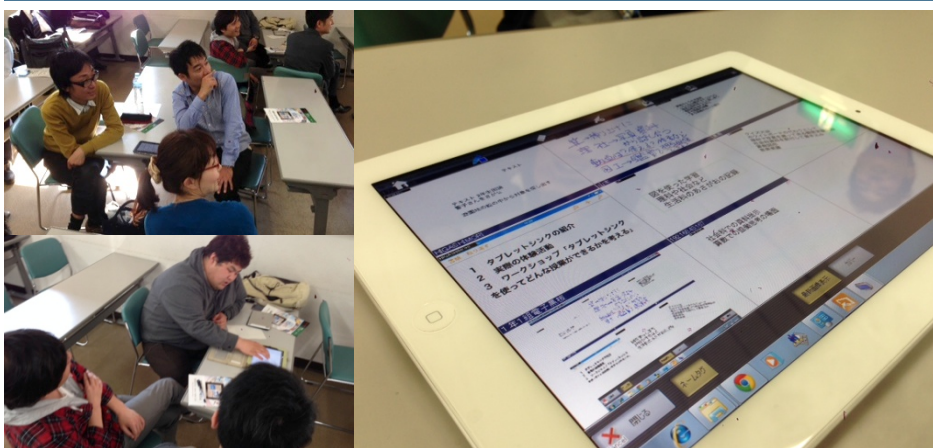
横浜市立小学校
情報・視聴覚研究主任様

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育研究部会員様

平成26年度 5月号

【発行】

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育部会
会長 渡邊 和也



タブレット端末を活用した学習スタイルの体験型研修

～タブレット端末クライアントソフトの活用～

5月の研究会は、スキルアップ部会・授業デザイン部会合同で開催しました。常盤台小学校東森先生の提案、パイオニア VC 株式会社の方々のご協力で、「タブレット端末を活用した学習スタイルの体験型研修～タブレット端末クライアントソフトの活用～」を行いました。他の都道府県、市町村では、既にタブレット端末が各学校に配備され始めています。横浜においても、そう遠くない将来に配備されることも考えられます。今回は、そんな状況でどのような授業が行えるのか、実際にタブレットを触りながら、体験型の研修を行いました。話を聞いているだけではなかなか

分からない、タブレットならではの便利さを感じられる一方、触ってみて、体験してみても初めて出てくる疑問や課題も見えてきました。

タブレットシンクというタブレット用のアプリを使って、研究会場を教室と考え、教師側の大型画面と、児童側のタブレット端末を使って、実際に体験しました。教師側から一斉に、画面を児童用端末に配信したり、児童側の端末から、教師側の大型画面に画面を配信したり、教師用（親機）端末を中心に、手軽に画面のやりとりを行うことができました。説明書がなくても、ボタン一つで手軽

にやりとりができ、「誰でも簡単にできる」という印象でした。算数や国語などの問題が提示された画面を全員に配信し、全員の解答や考え方を教師側が回収し、大型画面に並べて映すこともできました。上の写真は9分割の画面ですが、最大42分割まで任意で設定できるようです。

最後には、実際の活用場面を出席者で考えました。社会科の資料の読み取り、理科の観察・記録、体育、音楽、算数の練り上げ、特活・・・挙げればきりが無いほどに活用場面が考えられました。出席者全員が、楽しみながら学ぶことができた研修でした。

【次回予告】 6月4日(水) 15:30～ @西公会堂(横浜駅より徒歩10分)
スキルアップ部会: デジタルペン活用事例の報告と体験ワークショップを行う予定です。

授業デザイン部会: 思考ツールについての実践報告。デジタルとアナログの融合について考える予定です。

詳しくは、研究会案内をご覧ください。たくさんの方のご参加をお待ちしています。



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
〈青葉区 鴨志田緑小学校〉

メディアワールド

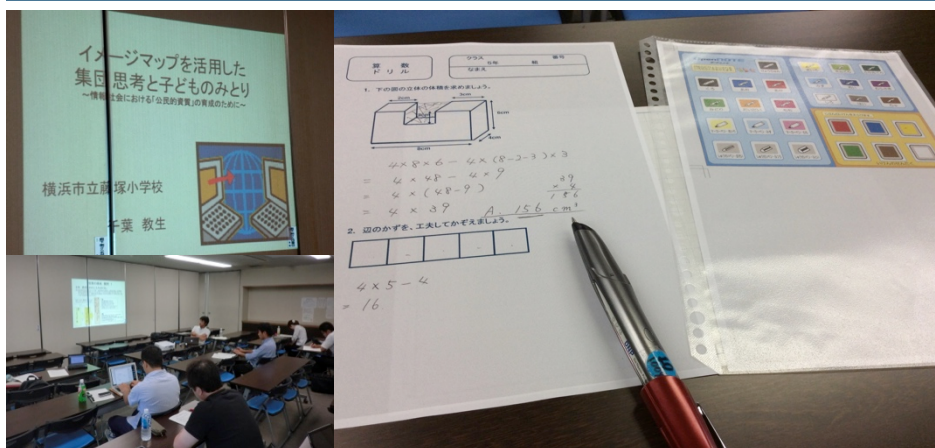
横浜市立小学校
情報・視聴覚教育主任様

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育研究部会員様

平成26年度 11月号
(6月研究会)

【発行】

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育部会
会長 渡邊 和也



スキルアップ部会「デジタルペンの活用事例」 授業デザイン部会「イメージマップを活用した集団思考と子どものみとり」

スキルアップ部会では、大日本印刷の方から、デジタルペンの活用事例を体験やグループセッションを交えながらお話していただきました。基本的な機能を説明していただいた後に、実際に1人1本のデジタルペンと紙を貸していただき、体験しました。次に、算数や図工の事例を通して、電子黒板やプロジェクターと連携した実践事例をビデオで紹介していただきました。書いた過程を再生しながら、自分の意見ややり方を発表するなど、色々な単元の150ほどの事例があるそうです。本部会の高野先生の活用事例として、少人数算数や国語の授業などでの実践についても紹介していただきました。実際に活用してみて、鉛筆感

覚で使える。学年を問わない。自分や相手の考えが見える、広く使える。Bluetooth なので、現時点でも使用可能など、たくさんのメリットを教えていただきました。また、最近全国で活用が始まっているタブレットとの連携の紹介もありました。

授業デザイン部会では、藤塚小学校の千葉先生による、「イメージマップを活用した集団思考と子どものみとり」について発表がありました。情報社会の中でどのように子どもの思考を促し、またそれをみとっていくかについてイメージマップ活用の紹介があり、会員からの意見をもとに活発に議論が行われました。イメージマップを活用することで子どもの

思考が広がり、深まりを自分で認識できる、可視化できるものとして有効な学習ツールになります。また、子どもの知っていることや考えていることをマップにすることで分かっていること／分かっていないこと、善と悪、知りたいことなどが見える化され、焦点化することができるというメリットがあり、今後の学習方法としてとても興味深い発表でした。



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
(青葉区 鴨志田緑小学校)

メディアワールド

横浜市立小学校
情報・視聴覚教育主任様

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育研究部会員様



平成26年度 11月号
(7月研究会)

【発行】

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育部会
会長 渡邊 和也

「思考の可視化とタブレット端末活用」

放送大学教授 中川一史先生

「思考の可視化とタブレット端末活用」について放送大学教授中川一史先生に御講演をしていただきました。全国各地の学校の現状をご覧になっている先生から、まずお話があったのが、タブレット端末について、「他の市町村では、入ってからの対応が多く、本末転倒の状況になっている場所もある。横浜市においてこのように導入前に様々な検討をしている意義は大きい。」ということでした。タブレット導入にあたっては様々なケースが考えられます。【教師分の導入】【グループ数分の導入】【1クラス分の導入】【複数クラス分の導入】【全校児童生徒数分の導入(公費)(私費)】と様々な方法が考えられる中で、それぞれのメリット

／デメリットについて紹介していただきました。また、他の市町村で導入が始まり、それぞれが抱えている課題などについても知ることができました。ただ、いろいろな課題がある中においても、現在のタブレット端末導入の波が止まることは考えにくく、いかに効果的に導入していくかが非常に大切だということを考える機会になりました。中でも、「One of them の ICT を意識しよう」という言葉がこれからのキーワードになってくるのだと感じました。他の教材・教具の方がよくないか？(選択)他の教材・教具との最適な組み合わせは？(融合)児童・生徒の慣れはどの程度か？(熟達)など、タブレットありきではな

く、タブレットとこれまでの学習ツールを上手に使い分け、より効果的に子どもの思考を促し、可視化するツールとしてタブレット活用を推進していく必要があります。これまでの板書の良さや紙媒体の良さを生かしながら、アナログのものとデジタルのものの中から、子ども自身がどのツールを使うか「最適化」を考えて使えるようになると、タブレット端末の活用が大きな効果をもたらすのではないのでしょうか。



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
(青葉区 鴨志田緑小学校)

メディアワールド

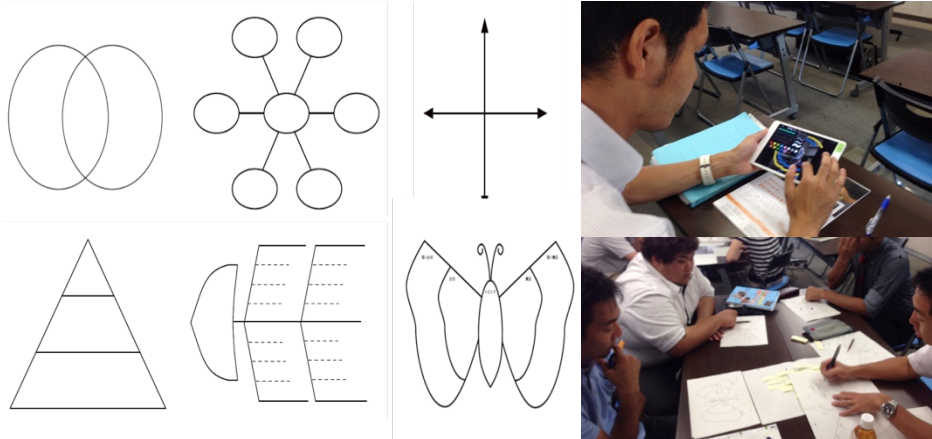
横浜市立小学校
情報・視聴覚教育主任様

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育研究部会員様

平成26年度 11月号
(9月研究会)

【発行】

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育部会
会長 渡邊 和也



スキルアップ部会 「ロイロノート・スクールの活用」

授業デザイン部会 「シンキングツールを使った授業デザイン」

スキルアップ部会では、株式会社 LoiLo 様のご協力により、ロイロノート・スクールの説明と体験を行いました。ロイロノートは、マルチプラットフォーム対応のタブレット用授業支援アプリです。教材の配布や質疑応答を、タブレットを使って行うことで、子どもと先生のコミュニケーションを活性化させ、子供たちが主体的に自分の言葉で説明できるようになる、21 世紀に必要とされる能力「思考力」「判断力」「表現力」を育むツールとして注目されています。テキストや写真、動画などを指一本でつなぎ合わせるだけで簡単にプレゼンテーションを作成することができる、とても便利で簡単に使えるソフトを紹介していただきました。このソフトを活

用することで、子どもの協働学習充実させるだけでなく、先生が子どもの学習状況を簡単に把握することが可能になります。実際に iPad を使って参加者の方々に触って、その活用場面等について話し合いをしました。

授業デザイン部会では、実際に参加者がシンキングツールを使い、シンキングツールの使い方や効果について研究を深めました。「考えることを助けてくれる」シンキングツールには様々なものがあり、参加者がジグソー学習の形で様々なツールを実際に使い、研究会の最後には、4年生国語の「アップルルーズで伝える」の授業案を考えました。シンキングツールを活用することで、子ど

も同士の話し合いが活性化したり、考えの流れを可視化できたりするなど、多くの効果について学ぶことができました。最終的には、多くのシンキングツールの中から、子ども自身が必要なツールを選択し、他教科・生活面において自発的に活用できる子どもに育てていくことが望ましいです。まずは、教師が思考スキルを用いる課題設定をし、「使ってみる」ことから始めようと思える有意義な研究会でした。



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
〈青葉区 鴨志田緑小学校〉

メディアワールド

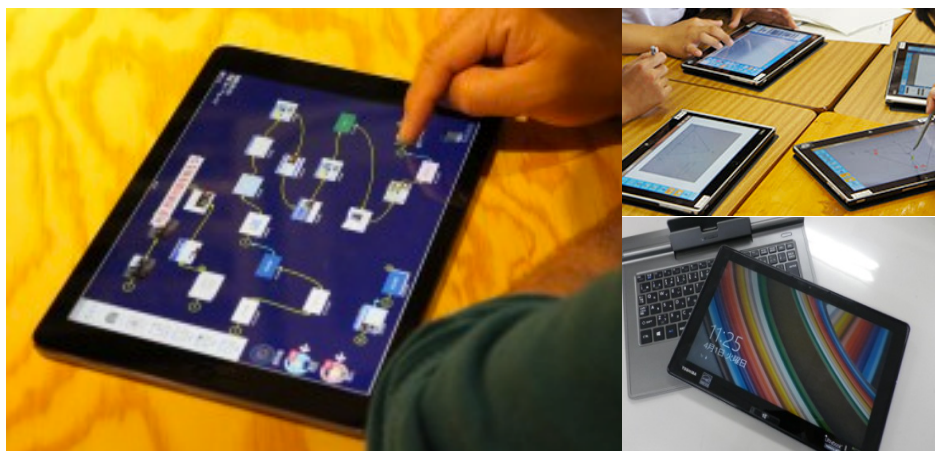
横浜市立小学校
情報・視聴覚教育主任様

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育研究部会員様

平成26年度 11月号
(10・11月研究会)

【発行】

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育部会
会長 渡邊 和也



横浜市一斉授業研究会(12/3) 指導案検討

スキルアップ部会 学活「『かがやきの足あと』でクラスを高めていこう」

授業デザイン部会 国語「4-2 おとなになるっていうことは物語」

～未来の自分に役立てるために「4-2職業デジタルリーフレット」
を作って街中で働く人の心の火をしょうかいし合おう～

スキルアップ部会では、本学級の児童の約半数がメールやメッセージのやり取りを日常的に体験しているという点を踏まえ、「非対面コミュニケーション」での留意点を児童が理解するためにどのような手段が効果的か、また本時の中でタブレット機器をどのように扱っていけばよいかをという点について話し合いをしました。教師が用意したメッセージの例について児童が話し合うという授業展開を前提に、「自分の思いを正しく相手に伝えること」「自分の文章で誰かが傷ついていないか」「友だちの姿をよりよく文章に表し、伝えられているか」といったテーマを子ども

たちが理解するために、どのような例文を用意し、文章の中の何に着目させて検討させれば良いかの議論を行いました。

授業デザイン部会では、「ICTを活用したコミュニケーション力のアップ」を目指し、①相手意識・目的意識と切実感のある言語活動、②情報活用能力の育成、③主張的コミュニケーションと思考の可視化、の3点について話し合いをしました。本時では、デジタル仕事リーフレットを見合い、「本気度を伝える観点」について子ども同士のコミュニケーションを促し、働く人の本気を伝える紹介文に推敲していく活動が主となります。研究会

では、「デジタルリーフレット」とはどのようなものを子どもたちにイメージさせる手立てや、「本気度を伝える観点」を具体的にしていく必要性について議論を行いました。本時では、ロイロノートを活用して、子どもたちが生き生きと活動する姿を見ることができそうです。

12月3日(水)

スキルアップ部会@西富岡小
授業デザイン部会@港北小



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
(青葉区 鴨志田緑小学校)

メディアワールド

横浜市立小学校

情報・視聴覚教育主任様

横浜市小学校教育研究会

情報・視聴覚教育研究部会員様

平成26年度 12月

一斉授業研究会

【発行】

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育部会
会長 渡邊 和也



横浜市一斉授業研究会

スキルアップ部会 学活「『かがやきの足あと』でクラスを高めていこう」

授業デザイン部会 国語「4-2 おとなになるっていうことは物語」

～未来の自分に役立てるために「4-2職業デジタルリーフレット」
を作って街中で働く人の心の火をしょうかいし合おう～

スキルアップ部会では、「タブレット端末を活用した、中学年における非対面コミュニケーションの育成」を目指して、公開授業を行いました。

授業では、児童がタブレット機器を使って毎日書き綴っている学級の振り返りの文章「かがやきのあしあと」を題材に、自分の思いを文章で多人数に対して正しく伝えるために、どのような点に留意すればよいかを考える場面でした。

研究討議で特に話題として挙げられていたのが、機器を使って活動することによって児童と教師との情報の共有化がどのように変化していくのかということでした。児童の手元にあるタブレットに教師からの教材が配信され、児童からの返信を学級で一覧するなどといった手法がどのように授業を変えていくのかという点について、様々な

意見が出されました。

今回の授業をもとに、タブレットを用いた授業形態での教師と児童、学級集団での情報共有といった手立てを、さらに集団思考、自己決定へとつなげていけるような学習展開を今後の課題として研究に取り組んでいきたいと感じました。

授業デザイン部会では、「教育メディアを活用し、コミュニケーション力を育む授業デザイン」を主題に公開授業を行いました。

授業では、4人で2台のタブレット機器を使い、作成途中のデジタル仕事リーフレットを見合い、互いに写真と文章の対応の整合性や、全体の構成について修正を行う場面でした。

研究討議では、授業のねらいを達成するための機器の活用や、コ

ミュニケーション力を高めるための手立てについて議論を行いました。タブレットならではの修正しやすいことや、扱いやすいこと、履歴を残せることなどが効果的だったという意見が出ました。一方で、アナログとデジタルの使い分けや、何をめざしたデジタルリーフレットづくりなのかをもう少し考える必要があるという意見も出ました。タブレットを使い、良いところを効果的に、しかし過度な期待はしないで、場面に合わせて活用することが求められるという講師の先生のお話が印象的でした。



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
(青葉区 鴨志田緑小学校)

メディアワールド

横浜市立小学校

情報・視聴覚教育主任様

横浜市小学校教育研究会

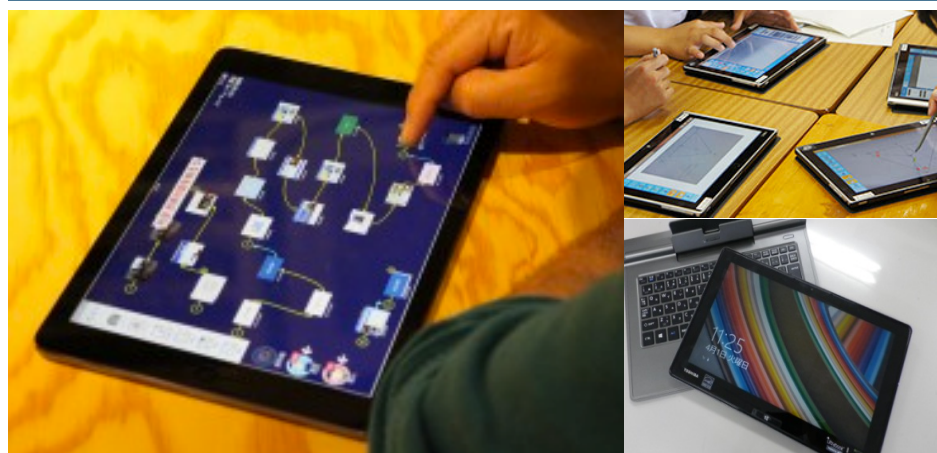
情報・視聴覚教育研究部会員様

平成26年度 2月

二次大会

【発行】

横浜市小学校教育研究会
情報・視聴覚教育部会
会長 渡邊 和也



一年間のまとめ

スキルアップ部会 研究主題「教員のICT活用能力のスキルアップをめざして」

授業デザイン部会 研究主題「教育メディアを効果的に活用し、コミュニケーション力を育む授業デザイン」

スキルアップ部会では、今年度も引き続き「教員のスキルアップ」を目標とし、タブレットPCの活用方法や環境整備、ICT機器の活用方・情報交換等の身近な課題、必要感のある課題について研究を進めました。

今年度、良かった点として、実践提案・研究だけでなく、どの場面でも意見交換の場を設けられたことが挙げられます。また、昨年度の課題であった「子ども同士のコミュニケーションツールの一つとしての情報機器活用」という目標も、公開授業や指導案検討を通してより一層深めることができました。児童のコミュニケーション力アップという目標に対しては、引き続き研究と実践を重ねていく必要がありますが、研究会として日常的に校務や

授業にICT機器を有効活用しながら進めていくために、スキルアップ部会では、校内の情報・視聴覚担当の先生方と実践や研究、交流の機会が更にもてるように工夫していきたいと考えています。

授業デザイン部会では、アプリケーションやネットワーク環境等に左右されながらも、企業のサポートを受けながら、タブレットの動的ツールとしての有用性を十分に発揮した実践を行うことができました。タブレットが協働的な学びと思考の見える化に寄与し、児童の主體的な学びやコミュニケーションを促しながら、学習活動を充実させる可能性を秘めていることが立証されました。同時に、児童が責任をもって機器を扱えるようなマナー・モラル指導が不可欠で、タブ

レットを日常的に活用し、児童の文房具的な存在にまで使い込んだ実践としては価値が高いものでした。情報モラルについては、児童の必要感に合わせて指導することもできました。

ツールが変わっても、またはツールが無くても大切な学びの価値はあるはずです。そして、ICTとともに大切な考え方やアナログツールの研究も興味深いものです。それらを総動員して授業をデザインしていくことを授業デザイン部会でめざしていきたいと思います。



【編集】

紀要・広報委員会 武井 三也
〈青葉区 鴨志田緑小学校〉

会員名簿

○ 校長

	区	校名	氏名
1	旭区	希望ヶ丘小	平野 成昭
2	泉区	伊勢山小	芳原 勝美
3	泉区	西が岡小	下畝 直人
4	瀬谷区	三ツ境小	立田 順一
5	磯子区	杉田小	岩崎 良之
6	磯子区	屏風浦小	渡邊 和也
7	戸塚区	下郷小	赤村 晋
8	戸塚区	東戸塚小	鈴木 国広
9	緑区	森の台小	田中 公明
10	緑区	竹山小	寛 宏彰
11	緑区	長津田第二小	田中 芳夫
12	青葉区	もえぎ野小	徳江 武司
13	都筑区	茅ヶ崎東	田屋 敏彦

○ 副校長

	区	校名	氏名
1	鶴見区	入船小	青木 勇
2	神奈川区	白幡小	高松 一彦
3	南区	南太田小	福田 恒一
4	南区	永田小	松本 未紀
5	旭区	上白根小	横山 美明
6	旭区	左近山小	安富 直樹
7	泉区	西が岡小	遠藤 守康
8	磯子区	磯子小	海老原 眞
9	港北区	港北小	宇佐美 公敏
10	緑区	緑小	安村 宏晃

○ 授業デザイン部会

	区	校名	氏名	学年	教科
1	鶴見区	獅子ヶ谷小	武田 旬	6	体育
2	鶴見区	下末吉小	要谷 智恵	2	生活・音楽
3	鶴見区	新鶴見小	細野 友貴	5	国語
4	鶴見区	末吉小	福田 博章	5	理科
5	鶴見区	馬場小	益田 洋一	3	体育
6	鶴見区	馬場小	伊藤 貴雄	5	国語
7	神奈川区	幸ヶ谷小	金子 真也	3	理科
8	神奈川区	幸ヶ谷小	三浦 光太郎	5	体育
9	神奈川区	幸ヶ谷小	亀谷 貴行	2	生活
10	西区	東小	平山 洋輔	6	体育
11	西区	一本松小	伊藤 慶	1	国語
12	西区	西前小	岡澤 寅午	5	体育
13	中区	立野小	江口 秀暁	6	理科
14	南区	南吉田小	山口 晃史	1	生活
15	南区	南吉田小	高橋 修司	6	社会
16	南区	南吉田小	西村 泰弘	4	理科
17	保土ヶ谷区	藤塚小	千葉 教生	4	社会
18	保土ヶ谷区	上菅田小	山中 健治	6	図工
19	保土ヶ谷区	岩崎小	北野 明宏	6	理科
20	保土ヶ谷区	岩崎小	嶋田 恭明	5	社会
21	旭区	左近山小	井寺 慎也	4	算数
22	旭区	都岡小	村田 親俊	2	算数

23	泉区	中田小	大江 恭寛	6	社会
24	泉区	和泉小	徳留 勇	2	理科
25	泉区	和泉小	須藤 こずえ	1	家庭科
26	泉区	葛野小	前川 深量	3	国語
27	泉区	上飯田小	山内 直人	5	社会
28	泉区	上飯田小	三ヶ月 章	6	算数
29	瀬谷区	瀬谷さくら小	松尾 健一	4	理科
30	瀬谷区	大門小	久松 篤	6	社会
31	瀬谷区	南瀬谷小	船山 桜子	5	理科
32	港南区	芹が谷南小	宮澤 進一	1	算数
33	港南区	小坪小	新保 智洋	4	理科
34	港南区	吉原小	小野里 勇貴	5	国語
35	港南区	日下小	小森 竜也	4	社会
36	港南区	港南台第二小	藤原 直之	個別	国語
37	磯子区	山王台小	富岡 洋悦	2	体育
38	磯子区	滝頭小	川口 翔	3	体育
39	磯子区	杉田小	金子 実	3	社会
40	磯子区	屏風浦小	長谷川 悠子	1	音楽
41	磯子区	汐見台小	脇野 航平	1	生活
42	磯子区	根岸小	湊 奈津子	1	生活
43	磯子区	根岸小	山本 哲平	3	理科
44	金沢区	金沢小	長澤 貴之	2	算数
45	金沢区	西富岡小	藤原 直樹	3	理科
46	金沢区	西富岡小	磯野 純一	4	理科
47	戸塚区	東汲沢小	吉田 圭一	6	社会
48	戸塚区	東汲沢小	島田 聡介	3	図工
49	戸塚区	俣野小	吉田 哲矢	3	図工
50	戸塚区	鳥が丘小	松本 仁治	6	算数
51	戸塚区	深谷小	宮崎 晃	5	理科
52	戸塚区	東品濃	山下 忠裕	3	社会
53	戸塚区	深谷台小	北條 完二	6	理科
54	栄区	千秀小	堀 彩香	個別	算数
55	栄区	上郷小	岩田 哲生	3	算数
56	栄区	庄戸小	平野 大二郎	6	理科
57	栄区	桜井小	神崎 健介	5	体育
58	栄区	公田小	山内 泰司	個別	理科
59	栄区	笠間小	外山 壮一	6	社会
60	栄区	笠間小	奥住 拓也	5	算数
61	栄区	笠間小	浦川 裕貴	3	社会
62	港北区	港北小	近藤 睦	4	社会
63	港北区	港北小	宮崎 憲太	3	社会
64	港北区	港北小	渡邊 秀樹	1	生活・英語
65	港北区	港北小	西垣 伸洋	TT	体育
66	緑区	上山小	和田 孝之	6	体育
67	青葉区	田奈小	市川 琢也	4	体育
68	青葉区	もえぎ野小	古宮 照一郎	2	体育
69	青葉区	もえぎ野小	白神 祐	4	理科
70	青葉区	鴨志田緑小	武井 三也	4	算数
71	青葉区	嶮山小	服部 学	6	体育
72	都筑区	すみれが丘	大内 貴弘	3	社会

○ スキルアップ部会

	区	校名	氏名	学年	教科
1	鶴見区	潮田小	若木 徹也	1	算数
2	鶴見区	平安小	小倉 秀仁	5	理科
3	神奈川区	二谷小	高野 学	2	社会

4	神奈川区	斎藤分小	山路 巖	5	社会
5	神奈川区	羽沢小	鳥井 裕子	5	算数
6	西区	平沼小	富士村 拓郎	2	算数
7	中区	北方小	堀 幸仁	5	理科
8	南区	別所小	野尻 亮	6	理科
9	南区	南太田小	佐埜 健	4	理科
10	保土ヶ谷区	笹山小	山下 昭文	児童支援専任	算数
11	保土ヶ谷区	常盤台小	東森 清仁	1	生活
12	保土ヶ谷区	初音ヶ丘小	小野 幹雄	2	理科
13	保土ヶ谷区	仏向小	長崎 伸也	5	体育
14	旭区	今宿小	伊藤 祐哉	5	理科
15	旭区	今宿南小	深澤 透	3	音楽
16	旭区	希望ヶ丘小	原山 雅治	少人数	算数
17	旭区	鶴ヶ峯小	矢澤 太陽	2	図工
18	旭区	さちが丘	鈴木 達也	2	社会
19	泉区	飯田北いちょう	藤原 智	4	体育
20	泉区	中和田南小	伊藤 雄太	6	理科・体育
21	瀬谷区	上瀬谷小	瑞慶覧 周	1	体育
22	瀬谷区	上瀬谷小	大木 洋平	6	国語
23	瀬谷区	瀬谷さくら小	諏訪 浩	専任	家庭
24	瀬谷区	瀬谷第二小	鈴木 義和	2	体育
25	瀬谷区	三ツ境小	佐野 幸彦	6	理科
26	瀬谷区	南瀬谷小	直井 千晶	2	体育
27	港南区	日下小	海邊 浩明	5	社会
28	港南区	桜岡小	西尾 崇昭	5	体育
29	港南区	下野庭小	福田 良章	5	社会
30	磯子区	洋光台第一小	菅原 純一	3	算数
31	磯子区	滝頭小	鈴木 輝美	6	社会
32	金沢区	釜利谷小	志岐 祐介	個別	体育
33	金沢区	並木中央小	吉田 和人	4	理科
34	金沢区	瀬ヶ崎小	小池 正登	1	理科
35	金沢区	能見台小	村田 寛志	6	社会
36	戸塚区	小雀小	青柳 俊彦	児童支援専任	体育
37	戸塚区	柏尾小	高野 健一	3	算数
38	戸塚区	東戸塚小	矢内 遥平	5	社会
39	港北区	師岡小	楠田 融	5	社会
40	港北区	篠原小	浅野 真弘	4	社会
41	緑区	新治小	福田 孝継	3	理科
42	緑区	三保小	西岡 大輔	教務主任	体育
43	緑区	いぶき野小	佐々木 翼	1	図工
44	緑区	竹山小	武藤 幸一	5	社会
45	緑区	長津田小	松岡 宏治	少人数	算数
46	緑区	長津田小	今泉 裕明	2	図工
47	青葉区	荏子田小	大石 元彦	4	算数
48	青葉区	市ヶ尾小	小串 智恵美	6	社会
49	青葉区	谷本小	須永 昌男	3	図工
50	青葉区	桂小	山田 啓太	3	体育
51	青葉区	美しが丘西小	仲 美記夫	1	算数
52	青葉区	美しが丘東小	松島 肇	6	体育
53	都筑区	川和小	木津 正晴	少人数	算数
54	都筑区	茅ヶ崎小	岡田 貴彦	4	理科
55	都筑区	すみれが丘	杉山 浩太郎	6	体育
56	都筑区	中川小	小山 英夫	4	図工

区世話人校長・副校長・部長・副部長名簿

(26年4月23日現在)

区	世話人校長	副校長	部長	副部長
鶴見	内海 明彦(馬場)	青木 勇(入船)	福田 博章(末吉)	松永 快哉(東台)
	唐澤 比利樹(新鶴見)			河原 敏彦(上寺尾)
神奈川	田中 宰(神橋)	高松 一彦(白幡)	高野 学(二谷)	榎本 渉(浦島)
		小倉 睦(西寺尾)		早川 洋一(池上)
西	小堀 敏明(一本松)	佐藤 裕二(西前)	平山 洋輔(東)	伊藤 慶(一本松)
				岡澤 寅午(西前)
中		中山 誠一(本牧南)	堀 幸仁(北方)	江口 秀暁(立野)
南	角田 和暁(六ッ川)	福田 恒一(南太田)	野尻 亮(別所)	五味 礼子(永田)
				若林 純(井土ヶ谷)
保土ヶ谷	山崎 行久(瀬戸ヶ谷)	高浜 正太郎(笹山)	北野 明宏(岩崎)	篠田 昌二(帷子)
		小林 雅弘(今井)		阿久津 純孝(上星川)
				山中 健治(上菅田)
旭	平野 成昭(希望ヶ丘)	横山 美明(上白根)	矢澤 太陽(鶴ヶ峯)	村田 親俊(都岡)
		安富 直樹(左近山)		井寺 慎也(左近山)
泉	下畝 直人(西が岡)	遠藤 守康(西が岡)	伊藤 雄太(中和田南)	藤原 智(飯田北いちよう)
	大嶋 孝昌(新橋)	前田 周子(東中田)		大江 恭寛(中田)
瀬谷	立田 順一(三ッ境)	小嶋一喜(瀬谷)	諏訪 浩(瀬谷さくら)	鈴木 義和(瀬谷第二)
				大木 洋平(上瀬谷)
港南	森山 豊実(永野)	宮島 章(日下)	宮澤 進一(芹が谷南)	西尾 崇昭(桜岡)
				新保 智洋(小坪)
磯子	渡邊 和也(屏風浦)	海老原 眞(磯子)	脇野 航平(汐見台)	山田 拓道(洋光台第二)
				菅原 純一(洋光台第一)
金沢	堀川 憲雄(能見台)	佐久間宣朝(釜利谷南)	長澤 貴之(金沢)	濱田 和彦(朝比奈)
	大橋 義信(八景)			村田 寛志(能見台)
戸塚	赤村 晋(下郷)	鳥山 真(深谷)	宮崎 晃(深谷)	青柳 俊彦(小雀)
	鈴木 国広(東戸塚)	野村 壽夫(舞岡)		吉田 圭一(東汲沢)
		矢島 正樹(平戸台)		
栄	後藤 俊哉(笠間)	松瀬 歩(本郷台)	浦川 裕貴(笠間)	町田 智雄(本郷台)
				関口 耕一郎(飯島)
港北	渡辺 辰哉(菊名)	宇佐美 公敏(港北)	鎌田 康一(矢上)	野口 貴洋子(綱島)
				中村 直樹(太尾小)
緑	田中 公明(森の台)	安村 宏晃(緑)	福田 孝継(新治)	和田 孝之(上山)
	笥 宏彰(竹山)	伊藤 主宣(竹山)		武藤 幸一(竹山)
青葉	徳江 武司(もえぎ野)	中嶋 弘喜(奈良の丘)	市川 琢也(田奈)	志賀 俊之(美しが丘)
	臺野 啓司(山内)	影井 靖子(谷本小学校)		
都筑	松井 加奈子(北山田)	浜名 伸明(都田西)	木場 幸太郎(東山田)	武田 晃治(勝田)
	田谷 敏彦(茅ヶ崎東)	大八木 秀晃(荏田南)		丸本 睦美(都筑)

あとがき

ICTを活用して、子どもたちのコミュニケーション力アップ

上記テーマを設定し、様々な実践を通して研究に取り組んできましたが、ここに今年度の研究の成果をまとめることができました。

子どもたち一人ひとりの情報活用能力を高めることを目指して、本研究会会員の諸先生方が、それぞれの視点・観点から多様な方法でアプローチした結果、十分な成果をあげることができたのではないかと思います。

紙面の都合上、一年間の研究の成果のすべてを掲げることにはできなかったと思いますが、この冊子を今後の教育実践に活かしていただければ幸いです。

最後になりましたが、ご指導くださいました諸先生方、研究推進に当たってくださいました幹事の先生方、授業を提供してくださった先生方、本研究紀要に執筆してくださった先生方に深く感謝申し上げます。

平成27年3月吉日
横浜市立常盤台小学校
東森 清仁

【紀要広報委員会】

委員長	東森 清仁	(保土ヶ谷区・常盤台小)
副委員長	武井 三也	(緑区・鴨志田緑小)